

よってたかって

生徒が育つ

まちが育つ

山田高校の
チャレンジ

山田高校
学校地域協働本部

事業報告書

山田高校学校地域協働本部

平成30年3月発行

よってたかって 生徒が育つ まちが育つ
～山田高校のチャレンジ～

山田高校学校地域協働本部事業報告書

山田高校学校地域協働本部

平成 30 年 3 月発行

はじめに

山田高校学校地域協働本部
運営委員長 依光 晃一郎

最初に、山田高校の背景について書かせて頂きます。

山田高校は、行政への政策提言をメインとした「総合的な学習の時間」において、全国的にもユニークな取り組みを行っております。1年生は市長に、2年生は高知県知事に、政策提言を行い、マスコミにも大きく取り上げられました。この冊子を通じて、山田高校生の目覚ましい成長と、山田高校の先生方の素晴らしいご指導、そして地域を巻き込んだ先進的なカリキュラムについて知って頂けると幸いです。

しかし、この冊子が伝えたい成果と情熱が、香美市をはじめ高知県内に、また香美市の中学生および通学圏内の中学生にも伝わっていないのが現状です。

今月、県立高校A日程の試験が行われましたが、私としては非常に残念な結果となりました。それは、山田高校を第一志望とした受験者が、昨年118名(定員160名)で倍率0.74だったのが、今年は88名で倍率0.55と、大きく受験者を減らしたことです。

山田高校の生徒達は、文部科学省が新しく示した新学習指導要領が目指す「生きる力」を身に付け、新成長戦略が掲げる課題発見・解決能力や論理的思考力、コミュニケーション能力など、これからの「人生100年時代」を切り開き、学び続ける力を身に付けた、頼もしい人材に成長していると私は思っています。この全国的にも先進校として胸を張れる山田高校が、受験者を減らしたのです。

確かに記憶力が重視される「偏差値という物差し」で山田高校を見た場合、他の高校には劣るのかもしれませんが。しかし山田高校に通った生徒の1年後、2年後の姿で比べてみると、県内一の進学校にも勝るとも劣らない生徒の姿があります。

この生徒の成長と世間の評価のギャップを埋めることは、山田高校だけの問題ではなく、日本の人材育成についての考え方を变える、大きな運動にしなければならないのかもしれませんが。山田高校が「偏差値という物差し」に代わる、「新たな学びの物差し」を作り出し、地域の中学生がこぞって受験する高校になるまで、山田高校のチャレンジは続いていきます。そしてその確立された「新たな学びの物差し」は、日本を地方から変える力になるのだと思います。

今後とも山田高校のチャレンジに対して、更なるご支援、ご協力をお願い致します。

目次

はじめに	2
図で見るプロジェクト概要	4
山田高校学校地域協働本部事業	
総合的な学習の時間の3年間の流れ	
よってたかって座談会「生徒が育つ まちが育つ ～山田高校のチャレンジ～」	6
生徒たちの変化を探る	
①1年生前期（CM制作チーム）	14
②1年生後期（市長提言チーム）	23
③2年生通年	27
平成29年度 総合的な学習の時間 取り組み記録	30
1年生前期	31
1年生後期	33
2年生通年	35
生徒たちの振り返り アンケート調査	39
1年生	40
2年生	45
地域連携コーディネーターがつなぎ役（浅野 聡子・吉田 美遊・長吉 真吾・板原 慶典・溝淵 知秀）	50
「よってたかって」yell	
安田 雅彦 氏	17
CM制作協力企業	18
高本 浩史 氏	22
塙 佳憲 氏	26
楠瀬 健太 氏	32
丹生石 大介 氏	36
高知工科大生メンター（福田 龍星・片田 有衣子・乾 有志・尾上 夏菜）	49
山田高校 担当教員（竹内 寛敏・助村 美保・島崎 恵理）	53
おわりに	55

山田高校学校地域協働本部事業

～香美学園都市構想における人材育成～

学校地域協働本部事業とは

地域住民や地元企業等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに「学校を核とした地域づくり」を目指し、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動を支援する事業

- (1) 山田高校学校地域協働本部の設置
- (2) 地域連携コーディネーターの配置
- (3) 部活動支援員の配置（華道・茶道・吹奏楽 など）
- (4) 学習支援員の配置（放課後、土曜英語塾など） ※土曜英語塾は英検取得をめざす講座

目的

地域の発展に思いを馳せ、地域創生に有為な人材を、地域と一体となって輩出する学校をめざす。



- 主体的に地域イベントやボランティア等の地域貢献活動に参加し、運営することができる。
- 地域の課題を発見し、その課題解決に向け全力で取り組むことができる。
- 他者を思い、他者と協力して行動することができる。
- 自ら学び、自ら判断し、自ら行動することができる。

総合的な学習の時間の3年間の流れ

[課題探究学習]

“よってたかって” プログラム

- 市全体で人材を育成するという姿勢
- 地域の担い手を育てるという姿勢

目標

「チームでイノベーション」 チームで協働して、地域課題にチャレンジする
～LPSプロジェクト～ (Local problem solution project)

期待される効果

- 地域活性化において当事者意識をもつことができる。
- 地域課題解決にむけたアイデア (知恵) が出てくる。
- 意欲をもって主体的に学ぶ生徒が増える。

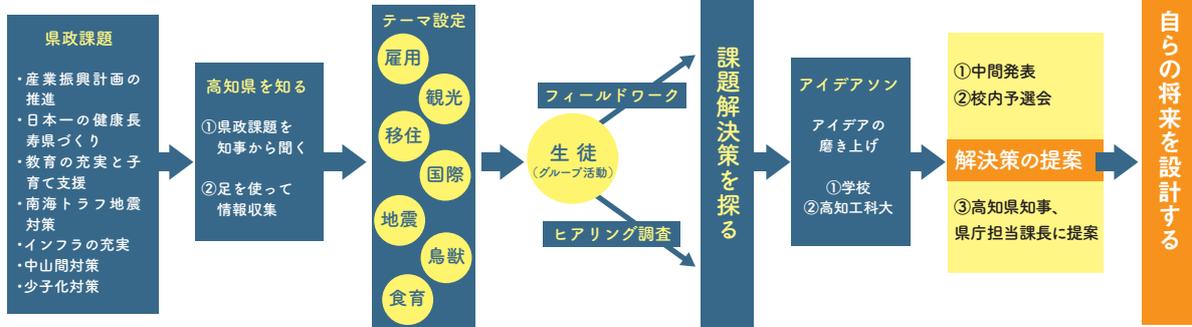
地域社会に貢献できる人材

3年生 個人で活動

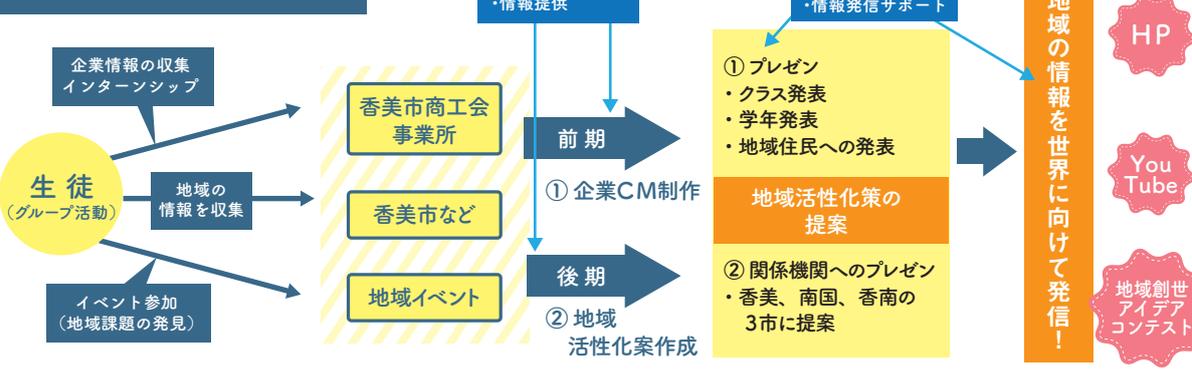
自分の進路に関するテーマを設定し、深掘りする

自ら主体的に判断し、
キャリア形成する力を育てる

2年生 チームでイノベーション



1年生 チームでイノベーション



「よってたかって座談会」
平成29年(2017)11月29日(水)

生徒が育つ まちが育つ

——山田高校のチャレンジ——



出席

高知県立山田高等学校 校長／濱田 久美子
香美市商工会 会長／寺村 勉
高知工科大学 地域連携機構 副機構長・地域共生センター長／浜田 正彦
香美市教育委員会 教育長／時久 恵子
高知県立山田高等学校 地域連携コーディネーター／浅野 聡子

進行役

山田高校学校地域協働本部 運営委員長
依光 晃一郎

山田高校のチャレンジを間近に見て……

依光：本日は進行役を務めさせていただきます。

私は地域がどうあるべきか……をずっと考えていて、高知工科大生と一緒に商工会の夏祭りなど、「大学生との地域づくり」みたいな活動をしてきました。でも高校は敷居が高かった。濱田校長が来られて、高校生とまちづくりを一緒にやることになり、高校生の意見が身近に感じられるようになったのは、とても新鮮ですごく楽しい、というのが率直な感想です。

今日集まっていたみなさんは、本事業のキーパーソンでもあります。まずは自己紹介をかねて、率直に感じていることをお話してください。

浜田：23年前から、高知工科大学の創設に関わりながら、地元の方々の支援を受けながら色々なことを一緒につくってきました。人口22000人くらいの土佐

山田町の中に、保育所、幼稚園、小中学校、高校、大学まで全部ある。これは、全国的にも珍しい。なんか使えんかな、というのは最初からありました。

商工会の方々の支援を得ながら、地域の祭りに大学生がコラボしたり、卒業式・入学式に協力をいただいたり、学生が地域の人と交わるという感じで一緒にやってきた経緯があります。ただ、高校に関してはなかなか手が出しにくい部分がありました。香美市の教育委員をやる中で学校へ入り始めた時、濱田校長が山田高校に赴任。色々やりだして、これはいいことやな、一緒にやろうという気持ちになって動いています。

寺村：2年前に山田高校さんから商工会と一緒にやりたいと声がかかってきました。何をしたらいいがやろう？というのがスタートでした。



依光 晃一郎 (山田高校学校地域協働本部 運営委員長)

「まちづくりを高校生と一緒にやって高校生の意見が身近に感じられるようになったのは、とても新鮮ですごく楽しい」

商店や事業所にとって一番大事なのは、GDPや消費といった経済動向です。とにかくお店に来てください、買い物に来てください、お土産物も作ります、観光もあります……そんな思いです。ですから、次の世代を担う子どもたちとどう関わっていくかなど、今まで考えたことのなかった分野かもしれません。人手不足という時代です。CMづくりは、商工会の皆がこんな仕事をしようということを見てもらえるいい機会になります。これはある意味絶対に逃しちゃうかん、と。

最初は、「インターンシップって？」から始まるわけです。「うちは一人でやりゆうき、なかなかよう教えん」「何か手伝わせてもかまんし、見るだけでもかまん。とにかく受けてください」みたいなお願いをして、協力していただきました。

「目から鱗」だったと思います。高校生は地域の活力、地域に高校があることはすばらしい、と感じたようです。しかも高校生という視点で物事が捉えられた。それぞれのお店や事業所も変わったし、商工会も変わった、というのが一番の印象です。

依光：香美市の商工会のメンバーが、特別ノリがいいのでしょうか？

寺村：ようやってくれゆうと思います。

若い頃、ある先輩から言われたことがあります。「誰かが町をよくしてくれると思ったけど、それなりの年になってきたら、やっぱりその立場で考えていかないかん」。山田高校の生徒さんが自然にこうしたことが身に付いていくとすごいな、高校1年から触れたことはきっと宝物になるという気がします。

浅野：私は2年前に、まさによそ者・ばか者・若者みたいな何も知らない丸裸の状態、地域連携コーディネーターという役割で、ここにに入れていただきました。

2年たって今思うことは、これはただの調整役ではないということ。図式的には各関係機関の間に立つポジションで色々な調整を行っていくという業務ですが、今は「新しい形のリーダーシップ」みたいなものと捉えています。「だれかがすごい」だけではなく、「みんなですごい」。一緒に力を合わせる必要がある中で、何者でもない誰かが間に入っていることがすごく重要なことではないかと思いました。関係者の間に入る柔軟性を持ちつつ、実は胸の内に強い意志を持っていて、「何も知らないこと」を武器に言うべきことはハッキリ言う。そういうことがきつと求められる役割なのではないかと客観的に感じています。

こうした「コーディネーター」という職業が、これからの世の中に必要なのではないか。専門性のある意味持ち過ぎず、どこにも属さず、常にフラットな視点で、リーダーシップを発揮する。主体性と協働性を持たなければいけないというこのポジションが自分にとって新しい挑戦であり、発見でした。

浜田：学校だけでなく地域にもそういう存在が必要になってきています。新しいものを起こしていくには、従来のやり方ではできなくなっている。一定の主体性と専門性をもって、その間を取り持つ「つなぐ人」が必要なんです。そうでないと地域は活性化しない。大事な役割です。

時久：私が教育長になって7年になります。最初から



浜田 正彦 (高知工科大学 地域連携機構 副機構長・地域共生センター長)

「新しいものを起こしていくには、一定の主体性と専門性をもって、その間を取り持つ『つなぐ人』が必要。そうでないと地域は活性化しない」

思っていたのが、香美市の学園都市構想。とにかく全部の学校をつなぎたい、でした。

ただその時は、課題山積でした。香美市は、保幼小中高大と特別支援学校まで、学ぶ場所は全部最初から揃っている。けれど香美市立だったり県立だったり、それぞれ立ち位置が違って、つなぐのが難しい面もありました。また中学校の「荒れ」の時代で、起こる事件を次々と解決していくので手いっぱいでした。課題を一つ一つ解決していかないとスタートの位置にも立てないという状態でした。

だんだん落ち着きを見せてくる中で、子どもたちにきっちり学力をつけて世の中に送り出そうと総力を挙げてやり出した時に、濱田校長が着任してこられました。

子どもたちを地域にどんどん出して人との関わりの中で学ぶという濱田校長の考え方は、私もいっしょでした。今の子どもは非常に守られていて、体験も少なく考えも浅い面がある。だからたくさん体験をして、たくさん人と出会って、下準備ができてきたら、自分たちでいろんなことに取り組んでいこう。内から沸き起こってやっていく力がもともとあるはずだから、そこへ火を点けてあげたい。

小中学校を卒業したら、山田高校がある、高知工科大学が探究を大事にした学びをしている。そういう町で子どもたちがのびやかに育ち、この地域を楽しくつくっていく。——私が勝手に思い描いていた学園都市構想というストーリーでした。

濱田校長：山田高校に赴任が決まった時、新聞に異動の記事が載ったんです。私の写真入りの新聞を見て、父が「ほんとに校長になったんか。偉い。ようやった」と涙を流して喜んでくれました。これまで父に褒められたことがありませんでしたので、とても感動して、父の期待にしっかり応えんといかんと決意を新たにしていました。

また、着任早々の4月、原前教育長から歓迎のお電話をいただきました。そして、地元で私の歓迎会を開いてくれるとのことで、当日は、原前教育長、時久教育長、信崎所長、香美市の校長さんたちがいらしてくれて、さらに感激しました。この人たちと一緒に新しい山田高校をつくっていきたい。私はこの山田に導かれていると思ったことでした。

学校づくりは、それぞれ地域の特色を生かしながらのやり方があると思います。山田は山田らしいやり方でやる。学校の外に答えはある、外の人たちを巻き込みながら、学校の中も変えていく。地域のあるべき学校とはどういう姿なのか、地域とともにつくっていき



濱田 久美子（高知県立山田高等学校 校長）

「学校の外に答えはある。外の人たちを巻き込みながら、学校の中も変えていく。地域のあるべき学校を、地域の中でつくっていきたい」

たいと考えていました。

今まさに地方創生が課題となっています。東京都一極集中、高知市一極集中では面白くない。それぞれの地域に特産品があるように、地域の色や匂いもそれぞれです。そのの良さを知ったうえで、教育方針や教育目標を考える。県立であっても市町村に所在する高校は、地域の人たちや子どもたち、保護者たちが何を願っているのかということに気づき、それを核に据えた学校づくりを行う。それが郡部校の役割だと思います。本校はまだまだ途中段階ですが、今まさに実践しているところです。

浜田：着任された時、自己紹介で「香美市立山田高校の校長です」と言われてましたね。

濱田校長：それくらいの覚悟を持ってやらないと、と思っていました。

教育は「希望」であって、子どもたちは「未来」です。10年後20年後の人口減少を食い止めて活力ある高知県にするには、今の教育にかかっていると思います。特に、高知市以外の郡部校の教育が大事です。地域の力を借りながら、「よってたかって」オールで、次の時代を担う高校生を育てていく。そういう覚悟というか決意を持った校長を登用し郡部校に配置する。そして、成果をきちんと評価していく。教員は元々志があって、高知県の子どものために何かやりたいと思っています。実績をきちんと評価すれば、「私はやる」という人はたくさんいると思います。

生徒が、学校が、まちが、こう変わった

依光：学校と教員の「評価」を考えた時に、山田高校がどういった変化を地域に生み出したかは重要です。山田高校の取り組みが色んなところに影響を与えていると思います。みなさんが捉えている「変化」についてお話ししていただきましょう。

浜田：小・中と大学をつなぐ「高校」がキーワードだと思っています。ここがしっかりしないと、全体が支えられない。小中が「足」だったら、高校は心臓も含めた「胴体」。大学は「頭」。心臓部分がしっかり活性化しないと、地域全体の教育の在り方が変わってこない。

地域を中心とした教育がなくては、地域も元気が出ない。山田高校はそれを率先してやっている。すごく刺激を受けています。大学生が入って色んなことをやることによって、大学の意義も出てくると思います。

寺村：インターンシップを通じて、高校生に自分たちの仕事を見てもらった。CMづくりを通じて、それぞれの会社の良さを高校生の視点でつかんでもらった。その中で、自らの仕事に対する向かい方に変化があったと思います。子どもたちに「どうしてこの仕事をしてるんですか？」とヒアリングされると、意気込みというものをもう一度掘り起こしてもらえます。

依光さんが「商工会のお店は町の公共です」という言い方をしていました。町にうまいお寿司屋さんがあったり、見立ての良い小児科のドクターがいたり、身近に気さくで笑顔のステキなコンビニの店員さんがいたり……これはすごく大事なことです。インターンとして子どもたちを受け入れることによって、そんなことにハッと気づく。それで、「ちゃんとせないかん」と思い、自らの仕事を真正面から捉え直すことができたのが一番大きく変わった部分なのかなと思います。結果、商工会の財産になったという気がします。

依光：私の会社にも高校生がインターンに来たことで、親父がちょっと元気になった。それは間違いない。

時久：学校は外へ一所懸命発信しているつもりだけど、外からは「学校のことがよくわからない」と言われます。

山田高校は子どもたちの状況や学びの様子とかいう



寺村 勉 (香美市商工会 会長)

「自らの仕事に対する向かい方が変わった。自らの仕事を真正面から捉え直すことができた。結果、商工会の財産になった」

ものを全部外へ出して、学校の教育を丸ごと見せている。しかも、地域の方のほうが先生方よりは社会のことも地域のこともわかっているので、どうぞ子どもたちの中に吹き込んでください、としている。だから学校へ入っていきやすいし、「こんな事思いついたけど」と学校に言える。

私は20年ぐらい前、楠目小学校にいたのですが、6年生が総合的な学習で一人1課題で1年間、追究していくことをしていました。それを高校生に聞いてもらいたいと山田高校に求めたのです。結果、2年生がロングホームの時間を使って聞いてくれました。子どもたちは心臓が飛び出るほどドキドキしながら発表しました。すると山田高校の先生方が、「小学生にもびっくりしたけど、それを見る高校生がすごいね」と。高校生が「どうやってそんなこと思いついた?」「小学校でこんなことができるってすごい」と言っている。「こんな優しい高校生の姿を見たことがない」と先生方。

とてもいい学習でしたが、1回きりでした。今、「高校生にかかわってもらいたい」とお願いしたら、「ありがとう! どうぞ!」と言ってくれそうな山田高校です。

依光：山田高校に相談したら断られない、みたいな雰囲気はありますね。来たものに柔軟に投げ返せるのが



時久 恵子（香美市教育委員会 教育長）

「子ども一人ひとりの個性を大事にしながら上手に伸ばしていく。学校の営みを外にさらけ出す。もう、これは革命です」

すごいと思います。

時久：子ども一人ひとりの個性を大事にしながら上手に伸ばしていく。学校の営みを外にさらけ出してくれているので、どこからも言いやすいし、共に高まっていく。もう、かつてない変化というか、これは革命です。

浅野：私は生徒とも先生とも企業の方とも業者の方とも触れますので、いろんな立場の変化をちょっとずつ見てきています。

2年間やって今感じてきていることですが、キーワードで言うと、「要望」かなと思います。これまでにはお願いに行ったりすると、期待とか不満とか批判とか……何か持っていそうだけど言ってもらえないとか、きれいな期待だけもらえるとか、そういう感じでした。でも今、言葉が「要望」に変わっている。

先日、ある企業さんにエピソードを聞きに行ったときのこと。「CM、こうなったらもっと面白い」「商業科と組んだらええやん」のように、ほぼ要望。私はそれがすごく嬉しくて。なんだか一緒に主体者になっている感じに変わっている。今までは協力を頼まれるという立場だったのかもしれませんが。報告書づくりのため今7社くらい回りましたが、「ちょっとアイデアあるがやけど」のように強烈な要望が何件もあるんです。こうした声を反映したら、さらに来年すごいことになると感じています。

先生方からも「もっとコーディネーターがこう動いてもらわないと困ります」など、今までなかったような話が出てくる。主体的な気持ちと、もっと良くしたいという気持ちがないと出ない発言だと思います。や

らされてる感・不満・批判みたいなものが、「もっとこうしたい」の要望に変わっているというのが、一番大きな変化だなと感じています。

依光：「開かれている」中でやってきたことが、信頼関係を築いてきたんでしょね。忙しいだろうと遠慮していたのが、お互いに言える関係になってきたと感じます。

濱田校長：色々変わったのでしょうけど、一番変わったのは、学校に外部の人がしょっちゅういるということ。

学校は閉鎖的な空間です。教員は専門力も高く、資質的には十分に高いレベルを持っていますが、真面目な分、堅い。地域とやり取りするとか地域に出ていくというのが苦手なんだろうと思います。生徒が粗相をしたり挨拶ができなかったりしたら、自分たちの責任だと思ってしまう。だから負担が増えて忙しかった……と感じていると想像しますね。

今までと違うところは、負担だし責任もあるんだけど、色んな粗相があっても地域連携コーディネーターというクッションがあるということです。

依光：浅野が悪い、と。

（皆の笑い）

濱田校長：そういうことなんです。地域連携コーディネーターの存在が重要なんです。

また教員は「お世話になったから、お礼に行かなくては」と言う。私は「行かなくてもいいんです、地域



浅野 聡子（高知県立山田高等学校 地域連携コーディネーター）

「まちの人も先生たちも、言葉が『要望』に変わってきた。一緒に主体者になってきている」

の子どもを育ててるんだから。基礎学力をつけるのは私たちの仕事。社会性を身につけるのは地域と学校が一緒になってやるべきことです」と。だから「半分は地域にも責任を持ってもらいましょう。何か失敗があっても謝るのはコーディネーターもしくは私であって、先生方に責任はありません」と。学校と地域で半分ずつ責任を持って生徒たちを育てていく。そういったことを浅野さんと共に先生方に話をしました。先生方は少し気持ちが楽になったのではないかと思います。

そして何が変わったか。——でき上がったものです。

最初、先生方は「高校1年生、いわば中学4年生にそんな動画が作れるわけがない。ポスターのように絵コンテでやる」と言うんです。実は浅野さんも半分、迷っていました。私は「ハードルは絶対下げません」と。CMは動画で音楽を必ず入れること。ナレーションは自分たちでやる。CM時間もきちっとキープする。——裏で浅野さんにハードルを下げないように言い続けました。

そうしたら、生徒たちは目標通りにやってしまいました。ものすごくいいものが出来上がりました。実は、生徒たちは写真を撮るのも動画を撮るのも私たちよりずっと上手です。だから1年目から良い作品ができ、今年はさらに良くなっています。

後半は市長への提言です。1年生たちはこれを半年でやってのけました。やればできるんだという感動でした。この課題探究学習では、大学生メンターが指導助言を行い、先生方は進捗状況の把握や見守るだけとしていました。

大学生メンターとの連絡調整には、生徒も先生方も困惑する部分がいっぱいありましたが、でき上がった作品は生徒の主体性溢れるものになっていました。それを見た時に「生徒はやればできる」と実感し、生徒たちに誇りを感じたのではないかと思います。

依光：責任は地域と一緒に分かち合おうとすると、地域のほうも責任感が生まれるし、仲間意識が生まれ、信頼がさらに深まっていきますね。

寺村：町が変わりつつありますね。楠目小学校が「あびす昭和横丁で、ネギトン丼を売りたい」と言っています。そんな話がたくさん聞こえるようになりました。山田高校の事例を見ながら、まちづくり、人づくりをどうしたらいいかを考え始めた、ということでしょう。

商工会は県内に25ありますが、会長会でよく言われるのが、「香美市さんはいいね、山田高校があるき。

ああいう学校が地域にあったらぜひやりたい」。まちづくりの根本的な考え方が、皆変わってきたんです。

浜田：CMを作るときに大学生が裏方で支援してきたことで、結果的に彼ら自身のモチベーションにも変化があったと思います。高校生とは年齢が近く壁がないからどんどん言えるし、自らやりたいという感じで入っていけるんだと思います。

浅野：大学生と高校生が育て合っているという場は何度も見ました。必ずしも年が上の者が下に教えるという構造ではなく、高校生から大学生への突き上げもありました。遅刻したりメールが返ってこなかったり、色々あるんです。高校生が「大学生としてどうなんでしょう」と言ったり、大学生は高校生に「礼儀ってのはこうだ」とか。お題もかなり難しいものが出ていたので、切迫感も緊張感もあり、何とかしたいという思いもあり。その中で学生同士が磨き合っている感じは非常に面白いなと思いました。

濱田校長：普通、連絡調整は教員がやります。このプログラムではそれは生徒にやらせましょう、と。後半は、香美・香南・南国と居住地別にクラスを超えたチームを組みます。クラスの日常もあるし、部活動も異なる、進学補習や居残り補習もそれぞれ。その中で、グループごとに調整して集まる。大学生との連絡調整も生徒たち。さらに個人の携帯を使ったらいけません、この空間でこの時間帯に学校のWi-Fiの設備を使ってやりなさい、という条件設定です。だから大混乱。生徒は限られた時間帯にメールを打つ。大学生は授業中で返せない。生徒たちはほんとに辛かったようです。先生方も「あれだけは改善してもらいたい」と。でも世の中ほとんどが調整なんですよ。[ほうれんそう]（報告・連絡・相談）を学ばせるためには、高校生からの仕掛けが必要だと思います。

「チーム」は「友達」ではありません。今の子どもたちは友達とは仲がいい。しかしチームプレーができない。社会では、プロジェクトに集められた人がチームとなり、与えられたミッションに対して最大のパフォーマンスを行うことが求められます。これがチームワークなんだと体験的に教えていきます。ですから、チーム員は教員が指名します。その中でどのように役割分担していくか、誰がリーダーシップを取るのか、それぞれのチームで悩み考えてもらう。しかも様々な点においてハードルを高く設定してある。ミッションは市長への政策提言ですが、裏には生徒の主体性や協働性を

培う細かな仕掛けがしてあるのです。

浜田：商業科のプレゼンは大学生よりすごい。ここまで喋れたら、世の中へ出て生きていける、人とコミュニケーションがとれる、大丈夫やなあと思います。

濱田校長：今年の1年生では、「良いチームが良い作品を作ることができる」や、「チームメイトや地域の人たちと交流し触れ合いながら、自分が成長している」といった感想がありました。私たちが目標としている

「協働性」について実感している生徒たちをうれしく思いました。

依光：考え方が違ってぶつかってけんかして、それでいいものが生まれていく、と理解できたのは、すごいですね。

濱田校長：私は、この生徒たちが大学に入った時、あるいは社会に出た時に、このプログラムが効いてくるのではないかと期待しています。

続けていくこと、広げていくこと

依光：さて、この取り組みを山田高校がしっかり位置付け続けていくこと、そして広めていくことが課題だと思います。そのためには……皆さんのご意見を聞かせてもらいたいです。

濱田校長：この取り組みは、特色ある学校づくりが実現できるプログラムだと思います。本校と同じやり方であっても、本校とはまた違ったその地域オリジナルな作品ができ上がる。だから、このプログラムが県内各市町村に広がり、高校生がそれぞれの地域を発信してほしいと願っています。今回、報告書を作ることで、このプログラムの意義を広く伝えられることは意味があると思います。

それと同時に、浅野さんの役割、地域連携コーディネーターという人たちの重要性を伝えたいです。是非、本校で経験を積んだ浅野さんが伝道師のようにあちこちに出て行って、高校に民間人のいる意義・意味を伝えてほしいと思います。

時久：地域連携コーディネーター同士が交流できるチームができるといいですね。

浜田：この前、地域おこし協力隊で嶺北高校に入っている鈴木くんに会ってきましたが、やっぱり優秀です。そういう人が現場に入ってつないでやると、町全体、教育全体が元気になっていく。彼に「どうして協力隊のような形で入ってきたの？」と聞くと、「土佐町が教育を中心にしたまちづくりを一貫してやる、と。その一言で応募しました」。そんな人たちを大事にせないかんと思います。

濱田校長：そういう人たちをどうやって取り込むのか。でも高知県は素養があるから、チャレンジの場として来なくなる。お金を儲けるとかではなく、地域の元気づくりを自分がコーディネートできるということに魅力を感じてくれる人がいると思います。

浅野：幸いにも今年は地域連携コーディネーターを5人に増員していただきました。この仕事はマニュアルを渡されてできるものではないと思うんです。一緒にやりながらつくっていく。これまでの先生の立場だと、生徒が大変そうなことはちょっとハードルを下げたほうがいいと思うかもしれない。それを校長に相談すると、目的は何だと突きつけられて、ああ確かに……と思ひ直し、もう一度先生とじっくり話し合う。そうして、「新しいリーダーシップの形であるコーディネーター」としてのスタンスが確立されていく過程が非常に大事だと思っています。

濱田校長：コーディネーターは、「上下」ではなく「斜め」の関係です。私にとっても皆にとっても斜め。だから触媒になって色んな対流が起こる。大学生が入ることで、教員と生徒の上下ではない、「斜め」の存在が生まれています。地域のおじさんやおばさんもそうです。そういう斜めの関係の人たちが地域や学校にすることで、新しい動きやイノベーションが生まれてくるのだらうと思います。

スイッチが入って学ぼうという気持ちがないと、勉強もしないし探究もできません。では、そのスイッチは誰が入れるのか？ 今までは担任か部活の顧問でした。しかし、今の子どもたちは多様ですから、大学生や地域の人、よそ者、そういう人たちが子どもたちを

刺激して、その気にさせる。

学習意欲があって、勉強に向かう。そこから学びは始まります。あんなふうになりたい、地域のために頑張りたい、だから勉強して大学に行きたい……というふうに、本当の学びをつくっていきたいと思います。

浜田：「斜め」という言葉は普通ネガティブな言葉ですけど、倒れないようにするには、まっすぐな柱だけではいけない。それを支える斜めの柱があってはじめて基盤がしっかりする。今の学校教育は先生と生徒の縦関係で、先生は教育だけで他のことは知らない。教員は個人商店的な部分があって、全て責任を持たなくてはいけないし、チームとして取り組む訓練が足りていない。この取り組みは、地域と責任を半分半分にする、かつ校長が責任持ちますよ、と。そうしたら先生方は非常に変わってくるのではないかと思います。

依光：まさにそのことを「チーム学校」と言うんですよね。

濱田校長：チームと言うとこじんまりした感じがするので……。小中と育ててきて、大学との真ん中にあるのが高校。高校から就職したり大学に入ったり、いわゆる地域の人材になる。大人として付き合いもしながら育てるためには、「よってたかって、オールでやろうよ」のほうが、もっとわかりやすい。

浜田：実際に地域も元気になっている。CMづくりに関しても、商店主さんも横の連絡で刺激し合ってる、成長もしている。そういう意味では、地域も元気にする高校生、学校を中心としたオールですね。

寺村：商工会だけでなく、ほかのいろんな業種にも広がっていくといい。農業体験とかも大事ですから。もっと町みんなが「よってたかって」でやっていけたらと思います。

濱田校長：高校生に「次のバトンをあんたらに渡すで。渡せられるような大人になってよ」というメッセージを、地域からもっともっともらいたいですね。

時久：まずは校長先生のリーダーシップでしょうね。「絶対、ハードルを下げない」と言い切る人。そんな人がいないと、やはりしぼんでくる。

経験した先生方がいなくなって終わらないようにするには、発表の場を置いたり、ボランティアがずっと

続くような仕組みにしたり、カリキュラムの中できちんと位置付けてやっていくことが大事です。山田高校には地域の人たちがいっぱい来ているので、そういう仕組みや行事で残すようにやっていけば、すぐには終わらないと思います。

また、ここにいた先生が散らばって、あっちこっちで火を起こしてくれます。今、香美市にも、山田高校へつながる子どもたちを育てるような授業をしてくれる人たちがいます。

難しいのは、山田高校のつくり込み方に教科書がないこと。この通りやればいいみたいなものがない。だから報告書として残せるのは嬉しいことです。

ただ、風は吹いています。県の教育委員会がコミュニティスクールにしましょう、地域協働本部をつくりましょう、と。これは国がずっと言ってきたことです。こういう学校でないとダメなんだという意識を持ちつつありますので、山田高校の実践が広まっていくひとつの大きな源はあると思います。

香美市に関して言えば、今までは小中で学んだら高知市へ目が向いていた。山田高校が一生懸命頑張って学校づくりをしてきたので、これからは山田高校へ入ってきだす時期が来ました。そして工科大までつなげたい。これで香美市の学園都市構想が本格的に動き出すだろうと思います。

これからは山田高校がこういう学校なんだとイメージ化できるようなものがが必要です。思い切り探究ができるカリキュラム。卒論が書けるくらいの学びができる。人と一緒にやるのが楽しい。地域づくりにすごく燃えてる……そういうイメージを吹き込みながら発展させていきたいと思います。

浜田：高知県は人口も教育もすべて高知市に集中している。できるだけ分散化させる核に山田高校をしたいと思います。

濱田校長：まず郡部に核となる高校が1校できないと、と思います。核となる高校を地域オールで「よってたかって」、ここにいるみなさんと創り上げる、やり遂げることが、他の市町村に対していい影響を与えることになるのかもしれませんが。香美市あげて学園都市へのチャレンジをしていこうということです。

依光：みなさんの思いはひとつだと確認できました。火がもっと燃え盛るような形でやっていきたいです。これからもチャレンジは続く！ ありがとうございます。

生徒たちの変化を探る①【1年生前期】

Mission まちの企業のCMを制作せよ！

1年生が28チームに分かれ、約半年かけて企業CMを作りました。

最終発表会で受賞した3チームの生徒たちに、事前・取り組み中・事後の感想などを聞きました。ここに生徒たちのストレートなコメントを紹介します。



① 坂田信夫商店 チーム

* 校長賞

評価ポイント：地元の特産品「黄金しょうが」を高校生目線でアピール。ストーリーがあり、ドラマ性もあった。



Q インターンシップ、CMづくりと聞いて、最初どう思った？

- ・普段CMは知っているけど、「つくる？」。知識ないし、無理！と思った。
- ・メンバー決めは先生が勝手にやったので、うまくやっていけるか不安だった。
- ・どんなことから始めていかわからなくて不安。
- ・わくわく。楽しみ。「CM大賞とれる！」

Q インターンでは何をしました？

[1日目] 工場で工程見学（洗い～芽とり・計量・パック詰め）／しょうがの「芽」を刃物でカット
[2日目] しょうがの「芽」を刃物でカット／写真撮影とインタビュー／CMラストの「しょうが丸かじり」の撮影

Q インターンをして感じたことは？

- ・社員さんの作業がすごく速かった。
- ・作業は難しくて大変で、社員さんはすごいなと思った。
- ・いろんな体験をさせてもらって楽しかった。
- ・「会社」って堅苦しいイメージだったけど、アットホームな優しい対応をしてくれた。

- ・「高校生」としてでなく、対等にフェアに接してくれた。
- ・社員さん同士が家族みたい。社員さんは坂田家の家族の延長。ぼくらが入りやすかった。

Q CM制作で大切にしたこと・こだわったことは？

- ・ストーリー風にして、黄金しょうがをアピールした。
- ・「坂田信夫」を強調した。
- ・声を大きくする（特に演技中）。
- ・心に残るインパクトを大事にした。

Q CM制作で苦労したことは？

- ・自分たちの体操服の名前が映っていたため、撮り直した。

Q もっとこうしたらいいと思ったことは？

- ・「USP」をもっと考えたらよかった。
- ・商品のよさをもっと伝えてもよかった。

Q 自分たちのよかったところはここ！

- ・チームワーク。めっちゃ仲良しになった。
- ・アイデアを出して、それを行動に移せた。
- ・完璧です！

Q 今、チームメンバーは？

- ・全員、小学校が違うので喋ったことなかったけど、今はなんでも話せる。
- ・夏休みも何度も集まって話をしたので、親密になった。

Q 自分の中で何か変化したと思うことは？

- ・敬語に不安があり、企業に行ったら普段と違う言葉を喋らんといかんのでは……と思っていた。今は言葉の種類が広がって、いろんな年代の人や男の人とも話せる。
- ・「大人っぷり」があがった。
- ・人前で話をするのが苦手だったけど、今は話せる。コミュニケーション力がついた。
- ・プレゼン力があがった。うまく伝えるにはどうしたらいいか、少しわかってきた。
- ・友達を多くつくるタイプではなかったけど、自分から積極的に話しかけて、友達を作ろうと思い始めた。

Q 企業の見方に何か変化があった？

- ・堅苦しいイメージがなくなった。
- ・まちで会社の建物や看板を見ると、CMを思い出して、身近に感じる。

Q 企業と今も何かつながりある？

- ・賞がとれて、食事会をしてもらった。
- ・「坂田」のロゴの入った制服の人をまちで見かけると、「あっ！」と思う。身近に感じる。でも恥ずかしくて、自分からは声をようかけん。

Q 来年の1年生へのアドバイス！

- ・チームメンバーの性格を知らないと、いいものはつけれない。
- ・チームメンバーは変えられないので、仲良く！



② 香北観光 チーム

*** 香美市長賞**

評価ポイント：高齢化する社員の悩み解決型。「働く人」に近づいたアットホームな内容。



居やすい職場であるということと、いつでも「お客様を第一に」を考えてつとめていること。

Q CM制作で苦労したことは？

- ・最初は「アットホーム」をテーマにして、社長の思いを中心にした。が、先生に「ダメ出し」された。
- ・社長の一番の悩みは、「会社に若い人がいないこと」。このテーマに見直し、全部、変更した。

Q もっとこうしたらいいと思ったことは？

- ・CMをどうつくるか、先を見据えて構成を考えたり、インターンシップに行くべきだと思った。

Q 自分たちのよかったところはここ！

- ・ナレーションがいい！
- ・ポップなBGMにして、香北観光のいい雰囲気を出した。

Q 今、チームメンバーは？

- ・全員、小学生からずっと一緒だから、気をつかわなくてもいい。
- ・思ったことがなんでも言える。

Q 自分の中で何か変化したと思うことは？

- ・CMは、最初は「できない」と思っていたし、途中、諦めそうにもなった。でも、できた。今は自信がついた。
- ・前より喋れるようになった。
- ・物事をやりきる力がついた。
- ・人と話をする力がついた。

Q インターンシップ、CMづくりと聞いて、最初どう思った？

- ・やれそうにない。
- ・難しそう。

Q インターンでは何をしました？

- [1日目] バスに乗って「ヤ・シィパーク」までドライブ／タブレットで撮影し、CMの素材を収集
- [2日目] 「日帰り旅行プラン」を自分たちで立てた（考えたのは「東京ディズニーランド日帰りプラン」）

Q インターンをして感じたことは？

- ・1日目は楽しかった。
- ・旅行プランを立てるのは難しかった。
- ・飛行機を使ってのプランだったけど、運行時間や移動時間など調べることが多く大変だった。
- ・社員さんに修正を指摘された。でも、できた！
- ・取材は初めてだったし、イメージもなかったけど、意外にやれる！
- ・自分たちで立てた旅行プランで実際に行ってみたい。

Q CM制作で大切にしたこと・こだわったことは？

- ・職場には年配の方が多く勤めており、若い人材が必要！ということと、アットホームでフレンドリーな雰囲気

Q 企業の見方に何か変化があった？

- ・「香北観光」はバスの運転だけが仕事だと思っていた。旅行プランも立てることを知った。
- ・会社って、役職やそれぞれの仕事の役割があり、いろんな人が協力、分担して仕事ができているんだ。
- ・おじさんが多くて暗いイメージだったけど、みんな明るく優しかった。
- ・それぞれの会社のすごいところがわかった。

Q 企業と今も何かつながりある？

- ・部活の遠征のバスが香北観光で、運転手さんと再会した。
- ・まちで会うと声をかけてくれる。

Q 来年の1年生へのアドバイス！

- ・職場の人とよくかかわって情報を集める。
- ・ストーリーをしっかり立てる。
- ・ナレーションを入れる。



③ ハチロー染工場 チーム

*** CM大賞・香美市商工会長賞**

評価ポイント：土佐山田の伝統産業「フラフ」づくりの工程に丁寧に向き合った。



Q インターンシップ、CMづくりと聞いて、最初どう思った？

- ・難しそう。何の会社かも知らないし、不安しかなかった。
- ・弟の鯉のぼりは家にあるけど、「すごいな〜」くらいの感じで見ていた。
- ・「フラフ」という名前も知らなかったし（「旗」と言っていた）、フラフを飾る意味も知らなかった。

Q インターンでは何をした？

- ・デザインから、染めまでの一連の工程を体験。
- ・まずは見本の絵柄に色付けの練習から入り、次はオリジナルを作った。女子が「HOPE」という英文字をメインにしたデザインを考え、色違いで男女に分かれて1枚ずつ制作した。

Q インターンをして感じたことは？

- ・工場の人たちがみな優しくかった。
- ・フラフが全部手作りであることを知った。
- ・フラフの大切さとつくる苦勞を、この体験を通して知ることができた。

- ・子どもの成長を願っているものなんだと、深く知った。
- ・楽しかった。

Q CM制作で大切にしたこと・こだわったことは？

- ・フラフの大切さを伝える。
- ・USPは「フラフがつなぐ子どもの未来」。

Q CM制作で苦勞したことは？

- ・アイデア出しに苦勞した。
- ・放課後に集まったの制作は正直しんどかった。
- ・一度、でき上がりを第三者に見てもらったら、「インターンの体験談っぽい」とダメ出しされて、また考え直した。

Q もっとこうしたらいいと思ったことは？

- ・BGMをつけたら良かったな、と思った。

Q 自分たちのよかったところはここ！

- ・USPを考えてつくったこと。
- ・「フラフがつなぐ子どもの未来」というコピーがよかった。
- ・ナレーションが上手い。

Q 今、チームメンバーは？

- ・チームが仲良くなった。

Q 自分の中で何か変化したと思うことは？

- ・ナレーター向いてるかも……。
- ・今はまだ、よく分からない（4人）

Q 企業の見方に何か変化があった？

- ・はじめは入口を間違えたり、不安しかなかった。敷居が高い感じもした。CM制作をして、親近感が湧いた。
- ・1つ1つ目的があってやっていることを知った。

Q 企業と今も何かつながりがある？

- ・部活でハチロー染工場に洗濯機を借りに行くことがあったけど、すぐく入りやすかった。

Q 来年の1年生へのアドバイス！

- ・チームワークが大事！
- ・人の話をよく聞くこと。みんなを集めるための声がかげも大事。
- ・思いつきじゃなくて、土台（コンセプト、USP）からよく考えること。

生徒の 声を聞いて

4月のスタート時、ほとんどの生徒が「不安だった」というCMづくりのミッションでしたが、「終わって今、振り返ると？」の問いには、全員が「楽しかった！」と即答でした。

「いい作品をつくるには？」の問いには、3チームとも「チームワークが大切」と発言。

30分ほどのインタビューでしたが、チームメンバーの一人ひとりの個性も垣間見えました。頼もしい発言をするリーダー、面白いことを言って場を和ませるムードメーカー、口数は少ないけどメンバーのつっこみにきちんと応える生徒……高いハードルの課題を共に乗り越え、一人ひとりを尊重する信頼関係が育まれている様子がうかがえました。

「よってたかって」
yell

こんな素敵な試みは ぜひ高知県全高校で

株式会社電通 クリエーティブディレクター
安田 雅彦 氏



山田高校さんの「新しい挑戦」に参加させていただいた株式会社電通・クリエイティブディレクターの安田雅彦です。

(1)地域と (2)学校が (3)従来の一方的な支援ではなく (4)お互いが成長し合える連携協働にて (5)生徒も成長し (6)地域も成長し (7)地域の未来を担う人材育成も見込め (8)地域の基盤構築・活性化をも図る。という……斬新かつ少し欲張りな目標を持った「山田高校学校地域協働本部事業」。

その事業の目標達成のためには、いったいどのような「手法」を用いたら良いのか。

山田高校の皆さんが選択された「手法」は、「地元・香美市の企業 20 数社のCM制作」を通じて学校と地域が連携協働する……という新しい「手法」でした。

この選択は、上記(1)～(8)の物事が一挙に動く大変わかりやすい「手法」であると思います。

そして、その「地元・香美市の企業のCM制作」のため、「CM制作のプロ」としての講演を2年連続でご依頼いただけ、作品審査にも参加させていただけたこと。CM制作37年のキャリアとともに、高知県出身のわが身には「なんとか郷土にお役に立ちたい」と燃えるような思いがありました。

講演を通じて生徒さんにお伝えしたことは4点。①地元・企業の良さを徹底的に考えよう。②地元・消費者がその企業の製品やサービスのどこを良いと思って買いにやってくるのか徹底的に考えよう。その①と②のベン図上の重なった部分が、③広告すべき点＝USP(ユニーク・セリング・プロポジション)。④そのUSPをCMとして力強く表現するには、どのように言葉・映像・音楽を駆使すべきか。——という内容です。

具体的には上記①は訪問取材した企業各社に根掘り葉掘り聞き。上記②は家族、親戚、知り合いなど地域住民の消費行動を考えてみる。その①と②を元に、③USPを特定し、④表現をチーム全員で研ぎ澄ます。ということです。

一方、各企業サイドの皆様は「わが企業の存在価値は何か」を高校生にどう魅力的に説明するかという行為を通じ、創業以来の熱き志を再確認でき。かつ、上記②「地域の消費者は我が企業のどんな部分を好きだ、良いと思っているのか」の解答を、次世代である高校生視点からもらえ、意外と新鮮な気づきになったのではないのでしょうか。

これはまさに従来の地域から学校への「一方的支援」ではなく、パートナーとしての「連携協働」であり、(5)生徒も成長し (6)地域も成長し (7)地域の未来を担う人材育成も見込め (8)地域の基盤構築・活性化をも図る……を実現しそうな予感が十分いたします。

高校生が社会や経済を地元企業から教わり、地元企業は自社の存在価値を生徒さんを通じて確認する。こんな素敵な試みはぜひ高知県全高校でやられたら良いかと、CMクリエイターとしても高知県出身者としても深く感じております。



四国コンテンツ映像フェスタ 2017
CM動画はこちらからご覧いただけます

▶ CM制作協力企業

- BAKE SHOP ヒジリ
 - (有) 香北観光
 - フラワーアート 花翔
 - 穂岐山刃物株式会社
 - セントラル自動車
 - (有) ハチロー染工場
 - 徳弘モータース
 - (株) 坂田信夫商店
 - 金高堂 土佐山田店
 - 西山商会
- カジュアルレストラン マリソル
 - ホームセンターマルニ 山田店
 - 土佐山田ショッピングセンター
 - ・バリューかがみの
 - ・バリューあけぼの
 - ・バリューノア
 - (株) サント企画
 - Cafe Ayam
 - 松尾酒造株式会社
 - (株) テラムラ
- (有) 池田モータース
 - 依光瓦工業有限会社
 - (株) 濱田農園
 - 茶房 古古
 - (株) 三谷ミート
 - 独歩堂
 - 公益財団法人 龍河洞保存会
 - (株) あさの
 - (有) 香長ダイハツ



「楽しい！に変える力」

金高堂 土佐山田店／店長 高橋 学氏

インターンシップで来てくれた時は、荷物を開けて品出しをしてもらいました。CM制作では色々なアイデアを持っ

てきてくれて、とても面白かったです。

生徒の主体性や協働性を育むのであれば、周りの大人もしっかりしないと生徒の力は育ちません。そういった意味でも、価値のある取り組みだと思えます。生徒が先生以外

の大人とコミュニケーションをとれる力は、これから必ず大切になります。

市役所と連携してふるさと納税の納税額を増やすアイデアや、高知大学の学生がやっているような「まちの運動会の復活！」なんかも面白い。地域みんなでこうした取り組みを進化させると、もっと面白くなると思います。

高校生には、今日の前にあることを「楽しい」に変えてほしい。大人になって外に出たら、きっと今よりしんどいことも多いけど、もっと楽しいぞ！



「もっともっと面白くなる」

BAKE SHOP ヒジリ／店長 岡林 聖氏

私も山田高校出身ですが、私が在学していた時代とは違い、学校が地域密着型に進化していることはすごく良いことだと思

います。高校生のうちから地元の企業を知って、企業や仕事に実際に触れて、社会に出た際には即戦力として活躍してほしいと思います。

CM制作の取り組みは大変面白いと思います。さらに取

材のための毎回の訪問を大切にして、「社会や企業を知る」という目的意識をしっかり持って臨めば、もっと面白くなると思います。

商業科や他の学年と連携できたらもっと面白くなるのでは、生徒同士が学年や所属を超えて知識を共有し合えばもっと面白い学校になるのでは、と期待が膨らみます。

高校生にはコミュニケーション能力を磨いてもらい、自分たちのやりたい事ができる進路を切り拓いてほしいと思います。



「やる気を奮い立たせてくれた」

独歩堂／藤野 真二氏

こうした取り組みに巻き込んでもらえることは、小さな商店としては非常に嬉しいことです。授業のために東京から一流のCM制作マンの方をお呼びしていると聞いて、そうした方に我々のお店の存在を知っていただく機会があるだけでも嬉しい。

生徒さんは取材に来るたびに店内の掃除をしてくれた

り、商品をどう置いたら良いかななどの意見を出してくれました。陶器に触れる機会もまだあまりない中で、価格に驚いたり、歴史を感じてくれると、こちらでも楽しくなります。

商店街に若い「気」が入ってくることはとても良いことだと思います。以前、この町を出て就職した青年が、Uターンを機に婚約者と共に来店してくれたことがありました。こうした若者とのつながりが、自分自身のやる気を奮い立たせてくれています。



「将来、選ばれる企業になる努力を続けていきたい」

株式会社 坂田信夫商店／代表取締役社長 水田 晶容氏

地域の企業は今どこも人材不足に悩んでいます。そんな中、山田高校の取り組みは地元の企業を救うことにつながるのではと感じています。高校生に対して、地元にもどのような企業があるかを認知させるのは、1社の取り組みではなかなか難しいことです。CM制作を通じて、会社の存在だけでなく、仕事の内容や魅力を感じてもらえる機会を持つことが

できたのは、非常に貴重です。

当社に来てくれた高校生も最初は会社の存在すら知らない様子でした。しかし、実際に見学すると80名もの従業員が働く工場であることに驚き、興味を持つ生徒もいました。そんな高校生を見ていると、地元で生まれ育つ18年間にたくさん地元愛を感じてほしいし、卒業後は視野を広げるため県外へ出たとしても、将来は地元のために活躍する人材になってくれると嬉しい。そして我々も、将来彼らに選ばれる企業になる努力を続けていきたいと思っています。



「高校生の視点をもっと活かしたい」

松尾酒造株式会社／代表取締役 松尾 禎之氏

「未成年の飲酒は法律で禁止されています」で締めくられたCMは面白かった(笑)。笑いがとれたなあ、と。

インターンでは、ピンを洗ってもらって助かる部分もありました。毎日できることがあるわけでもないのに、生徒さん向けの作業の下準備に少し苦労しました。それでも生徒さんが前向きに取り組んでくれ、よかったと思います。

このような取り組みで感じることは、高校生にどこまで期待をするか？です。目標設定をしっかりと、企業側も生徒側もそれを共有することが、とても大事だと思います。

高校生の視点を現場の商品やサービスに活かせたらもっと面白くなるのではないのでしょうか。地域には高齢者が多いので、高齢者との取り組みをするというのも面白いのではないかと思います。



「来年はどんなCMにしようかな。こちらも気合が入る」

有限会社 香北観光／常務取締役 熊瀬 文人氏

CMづくりを通して、地域の生徒との距離が近くなりました。コンビニでばったり会い、「頑張りゆかえ？」と声をかける

こともあります。

撮影したり、旅行コースを企画したり、今の若い子たちはすぐにできるので感心します。毎年違った顔ぶれで、積極的なリーダーがいたり、みんな受動的だけどリクエスト

がしっかりしていたりして、面白い。しかし、CMが完成した後は自信がついた顔になるのは共通しています。

最終の発表会には必ず行きますが、もっとたくさんの人が集まる場で複数回発表すれば生徒たちもさらに変わるし、企業にとっても嬉しいことだと思います。

さて、来年はどんなCMにしようかな。こちらも考えを持たなければ、と自ずと気合が入ります。いろいろな経験をして、卒業後は県外に出てもかまないので、地元の良さに気づいて、また地元に戻ってきてほしいと思います。



「高校生との接点は貴重」

株式会社 テラムラ／代表取締役 寺村 勉氏、総務課 浦井 理恵氏、
メモリアルサービス 山邊 三和子氏、業務課資材係 明石 里紗氏

企業訪問の際は、お盆フェアの様子を見てもらったり、灯籠の制作をしてもらったりしました。葬儀に参列した経験があまりない高校生が、葬儀の仕方や供花に関する質問をしてくれ、嬉しく思いました。しっかりした高校生だな、コミュニケーション力に伸びしろがありそうだなと感じました。地域社会の大人と接点

をもつ機会をもっと持てるといいなと感じます。高校時代に当社でアルバイトをしたという社員もいます。当社にとって高校生との接点は非常に貴重です。「こんな企業に就職したい」と憧れを持ってもらえる会社になりたい。こうした経験を通して、高校生自身が「こうなりたい」と思ったり、ご両親に感謝したりするきっかけになれば、とても嬉しいことです。



「地域の未来につながる取り組み」

徳弘モータース／代表取締役社長 徳弘 智之氏

CMは、基本的には生徒さんのイメージを聞いて、自由に作ってもらうようにしています。インターンでは、オイル交換をしたり、車について学んだりする機会をつくりました。もう少し期間が長ければ、もっとコミュニケーションが

できて、一緒に考えることもできるのと思います。地域の未来につながる取り組みですから、我々も手助けしたいと思っています。それにしても自分が高校生の時は「高校は卒業すれば良い」くらいに思っていたのですが、今はこんなにも違うのかと驚かされます。こんな機会があるのだから、山高生には社会に出る前にやりたい事にチャレンジしてほしい。実際の社会は厳しいぞ！（笑）



「香美市全体を盛り上げてほしい」

有限会社 香長ダイハツ／代表取締役 藤田 泰三氏

取材していただいた期間中は私どもの対応も十分とはいかないなかにあっても、生徒さんたちのやる気がとても伝わってきました。インターンでは、とにかく挨拶に重点を置き、スタッフの一員としてお客様に元気に接してもらうことで、当社の

モットーの大切さを感じてもらえたことと思います。山田高校の生徒さんには、山田地域に限らず、広く香美市を盛り上げていただけることを期待しております。CM制作や地場産品との商品開発も素晴らしいと思います。実経験を通して地元の良さを感じ、将来の選択につなげてください。私どもも地域に根差す企業として、精いっぱい応援させていただきます。



「フラフの見えるこの地に戻ってきてほしい」

有限会社 ハチロー染工場／代表取締役 三谷 隆博氏

伝統のフラフをつくる長い歴史を持つ当社には、小学生から社会人までたくさんの人たちが訪れてくれます。しかし、自分たちが希望しない「組まれた」チームが来るのは初めてのこと。チームとしてのまとまりもまだで、中学校を卒業して間もない子ども達が大丈夫かな？と、最初は正直そう思いました。こちらから「どんな絵がほしい？」と聞いてみたり、「こうしてみる？」と投げかけてみたり……どの程度手を差し

伸べて良いのか迷ったこともありました。しかし、生徒と会話し意見を聞いていると、だんだんチーム力が上がってきました。「僕のフラフはここで作られたものだ」と親に聞きました」という話には、感慨深いものを感じました。地域のイベントや産業を助けてくれる存在がいること、そうした高校生の姿が町の中で見えることは大切なことです。地域と接する力を伸ばせば、何年後かに刻み込まれているものに気づくでしょう。そして、フラフの見えるこの地に戻ってきてくれることを願っています。



「新たな気づき」

セントラル自動車／代表取締役社長 渡邊 基文氏

受け入れた高校生が街で会った時に声をかけてくれたのは、嬉しかったです。

最初に会った時は「中学4年生」といったイメージで、女の子は元気だけど、男の子は大人しい。男の子もどんどんリーダーになってほしい気がします。

高校生自身が自分たちのミッションをもっと明確に理解

すると良いと思いました。プログラムを支える大人も調整能力を高めて、インターンシップの目的がもっと明確に伝わると、企業も動きやすいと思います。

当社では高校生以外のインターンシップの受け入れも積極的に行っています。インターンを通じて、自分たちに新たな気づきが生まれるのは大きなメリットです。子どもたちを見る体験によって、「社会に良いことをしている」という意識が社員に生まれます。受け入れる側も学校側もどんどん磨いて、良いものにしていけたらと思います。



「ずっと続く教育活動であってほしい」

株式会社 あさの／代表取締役社長 浅野 平二郎氏

「何のためにこの会社があるのか?」——CMづくりを通して問われることは、当社にとっても、会社の価値や良いところを考えるきっかけになっています。地域全体の企業活性にもなっているのではないかと思います。

高校生はまだまだ社会経験が少なく、「どう?」と聞いても反応が薄かったり、男子の元気がなかったり(笑)

……と様々です。しかし、我々も知らないことが多いので、お互いを知ることが大事だと思います。

香美市には、刃物や染物、生姜など世界に誇る事業が多くあります。座学だけではなく行動や体験でそれらを知って、どんどん学んでいってほしい。そして受け入れる企業側は、採用難や工場の人手不足を解決する刺激を得られればと思います。10年でも20年でも続ける教育活動に育ってほしいと願っています。



「地元で龍河洞あり!」

公益財団法人 龍河洞保存会／会長 岡崎 淳一氏

毎年、生徒の特徴があって面白いです。今年はリーダーシップのある男子生徒がとても印象に残っています。

今年のインターンでは休憩所やエスカレーターの上り口で接客をしてもらいましたが、来年は洞内の説明を覚えてもらい接客してもらおうと思っています。

高校生だけでなく地元の中학생や小学生も受け入れられるようになり、生徒たちに龍河洞を知ってもらえるいい機会になりました。すべての年代の生徒たちを受け入れるという夢が叶ったのは、嬉しいことでした。

彼らが学校を卒業して県内外に巣立っていても、進学先や就職先で「地元で龍河洞という日本三大鍾乳洞がある」ということをPRしてくれれば、嬉しく思います。



「可能性が広がるCM制作」

有限会社 池田モータース／取締役 池田 繁仁氏

毎年、山田高校の生徒のキャラクターが違うのが面白い。去年は真面目なチーム、今年はノリの良いチームでした。

取材では、わたしはほとんど指示に従うだけでした。「こういう作業を撮らせてください」としっかりとした指示があり、「じゃあ、どうする?」と投げかけるだけで撮影はどんどん進みました。

ここに池田モータースがあるということを地域や高校生に認知してもらえるので、当社にとってCM制作はありがたい。高校生は将来のお客になる可能性があるし、将来ここで働きたいと言ってくれるかもしれません。

そういう可能性の広がる活動は是非続けてほしい。CM発表は山田の地域以外でも是非やってほしい。山田の高校生にはなんでもチャレンジしてもらい、変化の激しい時代を生き抜いてほしいと思います。

「よってたかって」
yell

地域と開く未来の教育

高知新聞社 地域読者局N I E推進部記者
高本 浩史 氏



地域の高校の使命、役割、責任とは——。教育現場を取材する記者として、いつも頭にある命題の一つです。

地域の振興拠点化、確かな進路保障……。単なる期待で良ければいくつかわかびます。しかし、集落が消え、子どもが減り、存続にあえぐ学校を目にすると、何もかもが机上の空論に思えてしまうのです。

そんな思考の行き詰まりに風穴を開けてくれたのが、山田高校の取り組みです。本事業での数々の活動は、地域の学校ができること、否、地域の学校でこそできることを示してくれました。

地域に飛び込んだ生徒の皆さんは、企業人に交じって汗を流し、大学生の助言で考え、高齢者に語り掛け、行政職員に思いをぶつけました。また、仲間とともに知恵を絞り、試行錯誤してCMを制作し、政策提言を練り上げていきました。

これほど濃密な学習を地域の学校で展開できたのは驚きです。学校の工夫と努力、そして地域や行政関係者の手厚い支援が、見事にかみ合ったからでしょう。記者として、時には当事者として生徒に関わった立場として、そう確信しています。

生徒たちが地域など実社会で学ぶ重要性は、以前から唱えられていました。ただ、いざ実施となると、生徒への意識付け、教員間の連携、学習時間の捻出、地域との連絡調整など課題が山積。地域も年々衰退し、受け皿となる余力も失いつつあるのが実情です。

ところが山田高校は、校長のリーダーシップの下、教員集団の熱意、教育委員会のサポート、地域連携コーディネーターの奮闘、積極的な情報発信など、全力を挙げた取り組みを見せてくれました。そこににじんでいたのは、未来を担う生徒を育成するという強い意志。地域が手厚い支援を差し伸べたのは、その意志が“伝染”し、共感したからこそだと、伝染患者の一人として断言します。

高校の教育は今、転換期にあります。その一端が、今後導入される大学入学共通テストや新学習指導要領。それぞれの方向性に、現代の日本社会が求める高校生像が投影されています。

その中で求められるのは、思考力・判断力・表現力であり、「主体的・対話的で深い学び」であり、課題発見・解決能力であり、根拠を示して自らの考えを論理的に説明する力です。高校は今後、こうした力を育む実践の構築を迫られます。山田高校は本事業で、その道筋を示してくれました。時代を先取りした実践だと言えるでしょう。

「高知市一極集中が叫ばれる中、立派だ。地域の皆さんに見守られて育つ。こんな高校もいい」「少人数教育や地域の特性、課題を教育資源にして、高校の存在価値を高める方法もあると思う。頑張れ、地域の高校!」。2016年から2017年にかけて、高知新聞「閑人調」欄で数回、山田高校へのエールがつづられました。山田高校の先進的な活動、そして熱意は、県民にも確実に伝わっています。さらなる展開を期待しています。

生徒たちの変化を探る②【1年生後期】

Mission

自分が生まれ育ったまちについて仲間と考え、
課題に対するアイデアを提言せよ！

1年生後期の課題は、香美市・香南市・南国市から出された次のような課題に対する解決策の提案でした。

- | | |
|-----|---------------------------|
| 香美市 | ■ 高齢者を主としたコミュニティビジネスの促進 |
| | ■ 農業の守り方・新規狩猟者の確保及び育成について |
| | ■ 香美市の森林資源を活用した循環型社会の構築 |
| 香南市 | ■ 三宝山を拠点とした観光プロジェクトを立案せよ |
| 南国市 | ■ 津波避難施設（タワー）の平常時活用について |
| | ■ 南国市のお土産 |
| | ■ ごめんの観光づくり |

平成30年(2018)2月7日、3市それぞれの庁舎でプレゼンテーションが行われました。

ここでは「まちづくり大賞」を受賞した3チームの生徒たちに、半年取り組んでの率直な感想、1年通して総合的学習を振り返っての自分の変化などを話してもらいました。

香美市 「活性炭で元気な体を手に入れよう！ ～活性炭を使ってジュースを開発」



■ 大事にしたこと

- ・香美市が活性化できるように、香美市に貢献できるように考えた。
- ・活性炭を香美市でつくることができるようになるといい。
- ・発表ではところどころゆっくり言ってメリハリをつけるなどの工夫をして、どうしたら伝わりやすいかを考えた。

■ 大変だったこと

- ・香美市で炭をつくっているところがあるのかについて調べてもすぐにわからず、電話をかけて聞いた。
- ・活性炭の作り方は専門的で理解するのが難しかった。さらにそれを簡潔に伝えられるようまとめるのが大変だった。
- ・最初はユズの活性炭ジュースを考えていたけど、すでに商品化されたものがあった。もう一度、1から考え直さなくてはならなかった。

■ 評価のポイント

- ・香美市には大きな産業がないので、活性炭をつくること

で1つの産業が興る可能性がある。

- ・「木を活用せよ」と言われて、他の班は木を削ったり、ものをつくるというアイデアだったけど、私たちは炭にして飲むという斬新なアイデアだった。

■ 自分の変化

- ・積極性がついた。
- ・最初は、別のクラスの人と一緒に班は不安だった。リーダーになって、いやだなあと思っていたけど、やっていると楽しかったし、やりがいを感じるようになった。そこは成長したと思う。
- ・入学したときは人と喋ることがぜんぜんできなかったけど、今は話せるようになった。1年、色んなことがあって、いっぱい成長できた。
- ・知らないクラスの人と喋れるようになった。

■ 次の1年生へのアドバイス

- ・とにかく斬新なアイデアを思いつくことが大事。他の班とは違う目線で、課題を一度見てみて、他にどんな使い方ができるかどうかを考える。

■ 感想なんでも

- ・人の前に出るのが好きじゃないので、提言では震えて、すごく緊張した。
- ・香美市は遊ぶところないし、食べ物で何が特産なのかすぐに出てこなかった。私たちの提案が、そのひとつになればいい。



香美市 市長 法光院 晶一

フレッシュなアイデアでまちを元気に！

今、「地方創生」と言われ、まちを元気にするためにユニークな事業をどんどんやるようなところを国は応援します、という流れになっています。アイデアがどんどん出てくるまちにするためにわたしたちも一生懸命考えていますけど、なかなか難しいなあというのが実感です。

香美市は今、来年度の事業の予算を査定していますが、一般会計だけでも195億円を超えるような数字になっています。実はその数字の中に、みなさんの先輩たちのアイデアが入っています。ひとつはア

ンパンマンミュージアムの周辺を元気にするためのアイデア、そして龍河洞を元気にするためのアイデアです。いいアイデアは事業として取り組んでいくというのが市の姿勢です。

今年もフレッシュな15のアイデアを聞かせていただきました。しっかりと光ったものがいっぱいありましたので、いくつかのアイデアは使わせてもらおうと思っています。若い感性から出たアイデアは他の若い人に必ず響きます。こんな元気な高校生がいっぱいいる山田高校をもっと応援しよう、という声も広げていきたいと思っています。このまちを一緒に元気にしていきましょう。

香南市 スカイキャンプ



■ 大事にしたこと

- ・お客さんに楽しんでもらい、家族に気軽に来てもらいたい。
- ・硬い感じではなく、柔らかい感じで。

■ 大変だったこと

- ・原型をとどめていないくらい直した。はじめは遊園地とキャンプを一緒にしたものを考えていたけど、先生から「どっかかにしぼった方がいい」とアドバイスされて、現実味のあるキャンプにした。
- ・頑張って考えたものを真っ向から「これじゃダメ」と否定される。それがけっこうきつかった。
- ・先生も大学生も、言うわりに手伝ってくれるし、提案もしてくれる。「評価シート」に改善点や現状の5段階評価など書いてくれて、わかりやすかった。そのアドバイスをどうやって取り入れていくかに苦労した。

■ 評価のポイント

- ・「スカイキャンプ」というネーミングは、校長先生も「いい」と言ってくれた。
- ・イベントに「冬のスイカ割り」——あえて季節はずれのものにした。ねらったとおり、市長から質問がきた。

- ・具体性があり、現実味がある点。キャンプの値段とカー応調べて計算して出した。
- ・想定した質問に対して短い言葉しか準備しなかったけど、台本に書いてないところもアドリブで説明した。
- ・山高生でのボランティアという提案も盛り込んだ。そういう地域連携がよかった。

■ 自分の変化

- ・冬休みも集まってたくさん時間をかけた。チームで協力しながらやれた。
- ・パソコンを使ってまとめたりするのに結構時間がかかったけど、それなりにうまくできて、発表もしっかりできたのはよかった。
- ・初めての人とコミュニケーションがとれるようになった。
- ・「こうしたらいいんじゃない」と自分の意見が言えるようになった。

■ 次の1年生へのアドバイス

- ・相手に自分の思いや意見を伝える。伝えないと後々、こうしていたらよかったと後悔する。
- ・チーム内の情報共有が大事。
- ・はじめは視野を広くしているんなものを取り入れて、あとは1点集中で考えた方が楽。

■ 感想なんでも

- ・賞がとれて嬉しかった。驚きの大賞。他のチームの提案はきらびやかだったけど、僕たちは「今どき感」をもちこんだ。
- ・市長に提言することなんて普通しないことができて、大賞ももらった。いい経験ができた。
- ・1から企画を考えるのは大変だった。こういうことを考えている人がどれだけ努力しているかすごく身に沁みてわかった。



香南市 市長 清藤 真司

地域の高校生の思いをプラスして

香南市の「三宝山を観光拠点に」というテーマは、山田高等学校の生徒さんの提言と同時進行で実際に事業化に向けて進めています。だから今日は「本気」で聴きたいと思い、楽しみにしてきました。

高校生ならではの提言がありました。「スカイキャンプ」「明るくし隊」「三宝祭り」など、言葉の使い方が面白い。また、いくつかのチームで出ていた「インスタ映え」は、これからすごく大事になるのかなと感じました。三宝山観光拠点化基本計画検討委員会の中では出たことがなかった感覚です。

今日ここには香南市在住の生徒さんが来ている。

スタート時点と比べたら、間違いなく香南市のことを知るようになったと思います。地域のことを再確認し、新たな発見をすることは、彼らにとってすごく価値のあるいいことですし、私にとっても一番嬉しいことです。

先頃開催した「市長と語る車座懇談会」では、山田高等学校の生徒さんから色んな意見をいただきました。バス路線の提案などは実際に動き出しています。大人にはない感覚に、はっとすること、参考になることがあります。地域の高校生の意見や思いがプラスアルファで加わり、活性化につながっていくことが大切であると考えています。

南国市 「トマトでまるごと元気!!! トマ丸ギョウザ!」



■ 大事にしたこと

- ・トマトが嫌いなチームメンバーがいた。自分たちで作って食べたらおいしかった。トマト嫌いでもおいしく食べられることが実験済み。やってみることが大事。

■ 大変だったこと

- ・最初 30 枚くらいあったスライドを、5 分のプレゼンに縮めるのが難しかった。

■ 評価のポイント

- ・斬新なアイデア、高校生らしい、と審査員からは評価された。
- ・発表が堂々としていてよかった。メンバーのキャラがよかった。

■ 自分の変化

- ・パソコンをうつのが速くなった。
- ・喋られるようになった。
- ・突っ走っていたのが、今は他の人の意見を取り入れたり、自分の意見を言ったり、メリハリがつくようになった。間くことも発言することも、どちらもできるようになった。
- ・今までは自分でやってしまうか、偉そうに「わたしもやりゆうき、やってや」になっていた。中学が一緒に言いやすく仲がいいので、分担するのが難しかった。今は自分で全部背負い込むのもなくなったし、人に強くガンガン言うのもなくなった。リーダーシップもとれるようになったし、積極的に物事に取り組める。

■ 次の1年生へのアドバイス

- ・堂々とプレゼンする。
- ・食べ物の提案だったら、実際につくってみる。「味は？」に答えられないのは説得力がない。

■ 感想なんでも

- ・最初はみんなダラダラしてさぼっていた。でも追い込まれたらスイッチが入り、クリスマスも集まってやった。
- ・山高は地域活動に力を入れているし、プレゼンテーション能力など社会に出て必要になることが高校生のうちに身に付く。自分が成長したように感じられるのが嬉しい。



南国市副市長 (市長代理)
村田 功

地域を盛り上げる人材に

高校生がこうした活動に取り組むことが、地域の未来にとって非常に良いことだと思います。また、こうした活動を実現する学校や関係者の方の取り組み自体も、素晴らしいと思います。

今日の提言の内容はとても良かったと思います。ただ緊張したのでしょうか、プレゼンテーションはもっと上達できる。伝えたいことを腹に落とし込ん

で、相手の目をまっすぐ見て伝えられると、さらに多くの共感を得られると思います。

自分たちが学生の時にはなかった経験です。教室での勉強ばかりではなく、こうした活動での体験を通じた学びは、これからの人生に必ず役立つでしょう。山田高校の生徒さんには是非、南国市や近隣市町村で大きく育て、地域を盛り上げる人材になっていただきたいと期待しています。

一般参加者の声

- 本当に実現したら楽しそうだと思う内容がたくさんあり、ワクワクしながら聞くことができました。
- 実現できるヒントがたくさんあったのではないかと思います。若い世代の豊かな発想をヒントにまちづくりを進めることが地域に必要なことだと思います。
- このような取り組みを小中学生にも見学させる機会を設け、プレゼン力や地域の未来を考える力を広めて(高めて)ほしいと思います。
- 市役所ではSNSを活用した広報は弱いところなので、やはり強化していかなければと思いました。
- きちんとした調査に基づいた提案であったことが非常にすばらしかった。

- アイデアや創造力がこれからの時代には大切になってきますね。何かと何かをつなげて新しいものを生み出す、そんな思考力をこれからも大切に育ててほしいです。
- 資料の収集、そして提案の根拠を示しながら提案できていて感心しました。
- 提言の内容がビジネスにつながるものが多く、実現したらいいと思うものが多くありました。
- いままで地元を愛する心(気持ち)を忘れずに。
- 時間があれば、ゆっくりと会話してみたいと思った。本当に楽しいアイデアでした。



香美市表彰



香南市表彰



南国市表彰



喜びの表情



地域のおせっかいで、 生徒が活躍できる

茨城県境町 参与
Chief Marketing Officer 補佐監
麗澤大学 地域連携センター 客員研究員

埴 佳憲 氏



僕が茨城県境町で企画実施していた「高校生アイデアソン」に、山田高校の皆さんが視察にお越しになったのは、2年前の夏でした。その当時の山田高校の皆さんは、目がキラキラと輝いていました。当時の「高校生アイデアソン」（現在は、「まちであそん」に名称&コンセプトも変更）では、高校生たちが自分たちの考えたアイデアを町長にプレゼンテーションし、町長から承認を受けたアイデアについては、町で予算をつけて実行するというものでした。山田高校の企画も自治体の長（県知事）に施策を提案するというので、とても素晴らしい取り組みだと思います。

この企画の旗振り役を買って出たのは、浅野さんというこの事業専属の地域連携コーディネーターです。地域連携コーディネーターは耳慣れない職種であり、地域と何かの架け橋となる職業です。まだまだ未開拓の職業ですが、浅野さんは学校と地域の橋渡しとして活動されています。浅野さんなくては、この事業は成り立たなかったと思います。その中でも「浅野さん、すごいなあ」と思うポイントを、3点ほど記したいと思います。

まず、何と言っても多くのステークホルダーをまとめたことです。「地域全体でよってたかって」というコンセプトにも表れているように、広く色々な人を巻き込んで、事業を創り上げています。何か物事を行う際、一般的にはステークホルダーが少ない方がよいです。意思決定のスピードが遅くなったり、利害が一致しないなどの理由で、プロジェクト自体が上手く回らなくなってしまう可能性があるからです。ただ、歯車が回りだしたら強く、多くの人を巻き込むことで、プロジェクトを他の人に伝えてくれるという拡散力や、色々なことを手配してもらったりというサポートを得られることがあります。この事業は、そういった「よってたかって」の良い点を上手く捕え、高校生を地域で育てるということを体現していると私は感じます。

学校教育の現場に正面から向き合っているところも素晴らしい点です。ハードルや制約がある中で、しっかり

と学校教育のカリキュラムに組み込み、全校的な取り組みとしています。持続可能性があり、地域住人からの、今後の期待も篤いことだと思います。高校魅力化の流れの中で、高校でも何か特色のあるユニークな活動を期待されている今日、山田高校は特色ある活動をしていると言って間違いのないと思います。

また、最初に打ち立てたゴールイメージが素晴らしいと感じました。「施策を県知事に提案する」ということを一番初めに打ち立てていました。最初から、スタッフは県知事と直接の繋がりを持っていたわけではありませんでした。一見、無謀だったかもしれませんが、ゴールイメージが明確であることで、色々な人たちのビジョンのすり合わせが可能になり、実現までこぎつけられたのだと思います。

投じた時間が全てというわけではないですが、今あげた3つのポイントは、全て浅野さんが主体となって下地作りをしていらっしゃいました。浅野さんはこの事業にかなりの時間を費やし、考え、行動していることが、遠く関東にいる私にも伝わってきます。それが、ステークホルダーである地域の皆さんを動かす結果に繋がったのだと考えます。まとめ上げること、学校教育に組み込むこと、知事に提言すること。その一つ一つがどれも簡単ではないことです。その苦勞を苦勞ともせず、いつもにこにこ笑顔でまとめ上げてしまう浅野さんは、本当にすごいなあと思います。

最後はもちろん、高校生が実際に活動しているということに尽きるでしょう。地域がよってたかっておせっかいをした結果、高校生がきちんと活動しているということが素晴らしいです。高校生にとっては決して少ない時間を割いて、これに取り組んでいること自体、普通ではなかなか実現が難しいことです。もしも僕が地元の高校生だったら、自分たちの考えたアイデアを直接、知事が聞いてくれるなんて！と感動しますし、ますます、自分の生まれ育った街を大好きになってしまいます。今後の取り組みからも目を離したくありません！

生徒たちの変化を探る③【2年生通年】

Mission

高知県が抱える課題への解決策を知事に提言せよ！

2年生は、高知県の抱える課題に対して関心のあるテーマを選び、チームで協力して1年かけて解決案を考えてきました。平成30年(2018)2月9日、高知県庁正庁ホールにおいて、校内で選抜された8チームがプレゼンテーションを行いました。

ここでは4人の生徒たちに、1年生から取り組んできた総合的な学習を振り返って語ってもらいました。



やりたいことが見えてきた

松下 海里

CMづくりは最初、正直あんまりやる気が出なかった。でも、行ってみると職場の雰囲気が家族みたいでよかった。夏休みは学校に集まってけっこう凝って編集した。

市長提言は、香南市の新しい土産物として文旦タルトを提案した。発表の当日、インフルエンザで休んでしまい、メンバーにさんざんに言われた。

知事提言は、高知の山と川を活かしたトリアスロンの提案をした。マラソンとカヌーと自転車というアイデアを、県議にプレゼンした。「実現できるのでは」と好評だった。ほんとは知事にも聞いてほしかった。このアイデアは本当に実現させたいと思っている。

総合的な学習の時間は楽しい。でも、班員に左右される

ことがあるからモチベーションを維持するのは難しい。やる気のないメンバーがいると、自分は結構誘ったりしたけど2人でやったりしたこともある。

この2年で人間的には成長したと思う。以前はこんな性格ではなかった。中学ではイライラしていて、あまり人と関わらなかった。外部の人と関わり出して、色々な考えに出会えたから、「ああ、そんな考え方もあるんだ」と気がついた。地域の清掃やお祭りにボランティアで参加しているし、生徒会もやっている。高校になったら変わろうかなという気持ちはあったけど、総合的な学習の時間が一番影響が大きかった。山田高校でよかった。

進路は高知工科大学の情報に入って、災害のときに役に立つような人を助けるロボットを作りたい。工科大に行きたいというのは高校に入った頃に決めていたけど、何をしたいかまだ決まっていなかった。最近、ボランティアなどに行き、やりたいことが見えてきた。一生、高知にいたいと思っている。



自分からやる！と決意できた

立仙 維吹

CMづくりは、ホームセンター。何も知らない状態で行った。すると、地域貢献を大事にしていると聞き、山田に地域に密着した会社があることに驚いた。

市長提言は、香南市のお土産づくりが課題で、シラフレークを提案した。チームメンバーは全然喋らない人ばかりで、実は困った。大学生メンターが助けてくれたけど、だれかがひっぱらないといけないと思って、リーダーシップを発揮せざるを得ない状況になった。実は人前に入る事はすごい苦手。でも、自分のためと思ってやった。おかげで、学校の発表は落ち着いてできるようになった。この経験は絶対プラスになっている。

知事提言は、防災と婚活をミックスさせた企画を提案した。どこにでもあるような防災では面白くない。でも、ちょっと何かが足りなかった。

総合的な学習の時間は休み返上だけど、得るものはその

分ある。ホームセンターでは地域のことを知ることができた。今、アルバイトをしているけど、その時の経験が活かされている。自分はコツコツすることが向いていると気づいた。

話す機会なんて普通ない市長に、自分たちのアイデアを伝えられてよかった。知事には報告書を出したので見てほしい。私たちの提案した防災プランを実際にやってくれたらいいなあと思う。ぜひ山田高校と高知工科大で協力して1回やってみたい。

みんな地域貢献ということに興味を持ったのではないかなと思う。私は高知が好きだし、ニュースとかに興味を持つようになった。自分から色々な事をやろうという気持ちも出てきた。

進路は高知県立大の社会福祉学部を考えている。ドラマで手話を見たとき「これかも！」と、はっとした。手話が必要としている人をつなげるようなことをしたい。

私たちはこのプログラムの1期生。誰もやっていない1期生に選ばれたのは嬉しい。ここから始まるんだなと思う。



地域のことを知るのは楽しい

伊藤 諒哉

CMづくりは身近なスーパーだったので、自分の地元について色々知ることができた。スーパーはどんな仕事をしているのかがわかり、挨拶の大切さを教わった。最初はCMなんてできないと思ったけど、工科大のメンターさん

に教えてもらって、いいものが作れたと思った。賞はもらえなかったけど、パソコンが使えるようになった。いいことだらけ。

市長提言は、アンパンマンミュージアムに人を呼び込むという課題だった。これは1位になった。

知事提言は県議向けに、香北町のだんだん畑は外国の方や都市の方に興味をもってもらえそうなので、それを体験できる会社を創るという提案をした。

聞いている人にわかりやすく伝えるにはどうしたらいいのか、パワポはどう使うのか、全然わからなかったけど、

大学生メンターが話しやすく熱心に教えてくれたおかげで、今はできる。企業にアポもとれるようになったし、いい経験になった。

最初、チームメンバーは仲良くなかったけど、最後は色々な事が話せるようになって、交流も深められた。

耕作放棄地が多いことをネットで調べたりして、香美市の状況を知った。地元のことを知るのは楽しい。総合的な学習の時間で活動したら、地域の人たちと出会えるし、社会にはいろんな人がいるなあとわかった。学校だけだとわからない。他の高校だったら、こんなこと知らないままだったと思う。

大変だったけど、原動力は「やるからには1番の賞をとりたい」だった。学べることがあり、得することが多かった。社会に出たときに地域の人たちと話しやすいし、あいさつもちゃんとできる、敬語も徐々に使えるようになったし、大人と話すのは楽しい。

将来は高知工科大に進学して、難しいと思うけど県庁に入りたい。



リーダーになって高知を元気にしたい

公家 安紀子

CMづくりは最初不安だったけど、作っていくうちにみんなやる気が出てきて、香美市教育長賞をとりました！

市長提言は、「じゃーかり」とネーミングした、おじゃこのかき揚げ。ピコ太郎のモノマネでプレゼンをした。「香南市をおもしろおかしくリードしたい」がテーマだったので、それを再現しなくては！と、思いきってやった。じゃーかりは地域のお祭りで実現され、商工会が今後どうしていくか検討中だとか。

知事提言は、しばてん踊りのフラッシュモブで移住を増やすというアイデア。中間発表ではズタボロ。「このスライドでは一番何を言いたい？」「それ、言えてないやん」と校長先生はびしっぴしっと言ってくる。直前の西脇さんの講演でのアドバイスは、できるだけ取り入れた。

私は3つとも班長だったけど、チームの仲間に支えられた。

少し前に県庁で開催された「高知家地方創生アイデアコンテスト2017」にも出場したけど、校長先生、教頭先生がちゃんと見に来てくれて、山田高校はすごいと思った。校長先生が「よかったよ」と一番ほめてくれて嬉しかった。

「高知家」の発表と知事提言の2つに出ることで、同じ内容でも見せ方を変えてどんどん工夫していく力がついた。また、全体を見る力が鍛えられた。夏休み、企業に突撃するという活動では、班員の家を考えて行き先と日程を組んだ。みんなの不満なくまとめるのは班長の仕事。班員をまとめるリーダーシップがより磨かれたと思う。

今まで普通に暮らしているところにすごい特産品があることを知り、当たり前前に食べていたおじゃこが県外では食べられないということを知った。地域を身近に感じるようになったし、高知が大好きになった。山田高校の総合的な学習の時間はちょっとしんどいけど、忙しい方が余計な事を考えなくていいという利点もある。

高知大学の人文社会科学部に進学したい。リーダーになって高知を元気にしたい。



学校でのアイデア出し



アイデアソン①で大学生にプレゼン



アイデアソン②で課題をさらに探究



プレゼンの達人から直に学ぶ



平成29年度「対話と実行座談会」県政課題解決のための知事への政策提言

平成30年(2018)2月9日(金) 14:20～16:20 高知県庁正庁ホール

【プレゼンテーションタイトル】

政策提言テーマ1

「雇用・鳥獣対策、スポーツ教育について」

- ① 鳥獣管理補完計画 ～法人設立→ハンター増加～
- ② リアルな鬼でハラハラ・ドキドキ大作戦 ～鬼ごっこをして体を動かす楽しさを知ろう～

政策提言テーマ2

「地震対策・防災訓練について」

- ③ ペットと一緒に過ごせる避難所づくり
- ④ ペットと共存できる避難場所をつくらう
- ⑤ 防災・減災への意識をさらに高めるには ～家具固定率100%を目指すイベント～

政策提言テーマ3

「観光振興・おもてなしについて」

- ⑥ はりまや橋を“残念”だけで終わらせない！
- ⑦ もう「高知はどこ？」とは言わせない
- ⑧ 高知にはしばてんがおる！ ～フラッシュモブでしばてん踊り～



「課題解決策は現在進行形」

高知県知事 尾崎 正直

みなさんの取り組んだ課題はものすごくリアルなものでした。そして、提案された解決策はわれわれ大人が考えるものとはずいぶん違うなあと思いました。

人口減少問題の解決策に「しばてん踊り」、ペットの避難所問題の解決策が「運動会」、だとは思わなかった。高校生ならではの柔らかい発想に、すばらしい、なるほどな、と大変感銘を受けました。

解決策というのは、いきなり100点満点のものなんてありません。どんどん進化し続けていき、知恵がさらに練り込まれていくものです。

県政の現状や課題を知るために勉強されたという「産業振興計画」も同じでした。この計画は、県庁の各部署のみなさん、県民のみなさんと活発な議論をして、手作りで作ってきました。最初は今の冊子の10分の1くらいでした。毎年実行してみて、どう改良するかを議論して、それを積み重ねて今に至っています。

みなさんが社会に出て仕事をするようになって、色々な課題にぶつかって克服しようとするとき、すべて現在進行形で解決し続けていくことになるんだろうと思います。課題解決策に完成形はありません。常に現在進行形です。

ぜひ、これからも課題を考え続けてください。今日出た意見を取り入れて磨いていけば、さらに進化していくのではないのでしょうか。みなさんのパワフルに進化した提案を、ぼくもまた勉強させていただきたいと思います。



緊張感が漂う会場



知事の前で発表スタート



ユニフォームも揃えて熱意を伝える



「やりきった！」最後は集合写真

1年生 [前期]

総合的な学習の時間

「取材力・情報編集力の向上をめざす」

目的 地域を体験的に理解し、つなげる。情報収集・編集・発信力を身につける。「よってたかって」「できる」の醸成。

地域を知り、地域とつながり、地域で育てる「企業CMづくり」

地元企業28社

5人1チーム

動画編集

インターンシップ

平成29年(2017)9月16日 糸びす昭和横丁初日 ふらっと中町にてCM発表会を実施

3
情報
発信

学校地域
協働本部
CM発表会、
審査、表彰

地域の人に発表する

地域の施設でCM、学び、想いを発信する。
インターネット上に公開し、世の中に発信する。

9/16
地域発表
9/6・9/13
クラス発表、学校発表

各委員より表彰

担当企業招待

2
情報
編集

株式会社
電通
CMづくりの
考え方、作り方

USPIは何？「伝わる」動画編集に挑む

企業の魅力を伝えるためのUSP (Unique Selling Proposition)を考え、紙ではなく動画による編集を行う。

8/8~10
高知工科大生から
動画編集を学ぶ

6/14
プロからCMづくりを学ぶ

高知工科大
情報学群 5名

電通
安田氏 講演



夏休み

7/21~8/5
夏休み2日間 インターンシップ

1
情報
収集

高知新聞社
取材の仕方、
メモの取り方

地元企業28社への取材・インターンシップ

地域を支える企業に出向き、話を聞く。
実際に働き、感じ、学ぶ。

5/17~7/12
担当企業への取材

4/19・4/26
地域のリーダーの話を聞く
プロの記者に取材の観点、
方法を学ぶ

香美市商工会長
寺村氏 講演

高知新聞社
岡林氏 講演

学校より依頼
協力企業



生徒：28チーム編成

番号	実施時期	タイトル	内容
1	4月13日	オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム分け。 ・半年後のゴールイメージを共有(CMづくりを通して主体性、協働性、プレゼンテーション能力を身につける)。 ・前期のテーマ発表、最終CM発表について、半年間の進め方を共有。 ・先輩のCMを見せ、企業CMをイメージさせる。
2	4月19日	【講演】 情報の収集・編集・発信の重要性、これからの時代を生き抜くために	講師：高知新聞社 岡林 直裕 氏 取材者の視点（取材の際にどのようなことを考えているか）、具体的な取材テクニックについて学ぶ。テーマは「好きなこと・もの」。①オウム返し ②確認のボール ③1番言いたかったことの確認 をペアワークを通じて学ぶ。
3	4月26日	【講演】 地元企業の経営者が考えていること・香美市の魅力、課題について	講師：香美市商工会会長 寺村 勉 氏 地元経済にどのように関わっているか、地域をどうしていきたいか、山田高校の生徒に期待していること等を学ぶ。「寺村さんが一番伝えなかったことは?」「自分が最も関心をもったことは?」。講演後、2つのポイントのいずれかで400字の記事を書く。
4	5月17日	取材準備	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーを決める（リーダー、サブリーダー）。 ・自己紹介を兼ねて、名刺交換の練習（次回までの宿題として、学校内の先生2名と名刺交換をする。担当企業について情報収集する）。 ※事前に地域連携コーディネーターが企業へ依頼、訪問日時の連絡をした上で、生徒が訪問する。訪問先には教員が引率せず、生徒だけで訪問し、地域の方々と深く関わることで、生徒の主体性やコミュニケーション能力を育てる。
5	5月24日	地元企業の取材①	<ul style="list-style-type: none"> ・担当企業に出向き挨拶（名刺交換）をする。 ・事前に調べた企業のことを基に取材を開始し、聞いた内容をメモにとる。次回の取材時間の約束をする。 WS ※担当企業については、ランダムに教員が決定する。興味関心で生徒に決定権を与えることなく、常に与えられた環境でベストが尽くせるスキルを養う。
6	6月7日	地元企業の取材②	<ul style="list-style-type: none"> ・取材先企業に出向き取材の続きを行う。 ・前回聞けなかった話を聞いたり、前回とは違う方に話を聞いたりする。聞いた内容をメモにとる。次回の取材時間の約束をする。
7	6月14日	【講演】 効果的なCMの作り方	講師：株式会社電通 安田 雅彦 氏 効果的・魅力的なCMづくりの考え方やテクニック等を学ぶ。 ①地元・企業の良さを徹底的に考えよう。 ②地元・消費者がその企業の製品やサービスのどこを良いと思って買いにやってくるのか徹底的に考えよう。その①と②のベン図上の重なった部分が、 ③広告すべき点=USP(ユニーク・セリング・プロポジション)。 ④そのUSPをCMとして力強く表現するには、どのように言葉・映像・音楽を駆使すべきか（宿題で絵コンテのアイデアを考えてくる）。
8	6月21日	CM制作① USPシートの作成	<ul style="list-style-type: none"> ・考えてきたCM構成に基づき、作成に必要な情報・写真や動画等の素材・コピーを考える。 ・取材、編集などの役割分担とスケジュールを計画する。 WS ※USPシートを活用してCMで伝えることを考える。
9	6月29日	CM制作② USPの磨き上げ	<ul style="list-style-type: none"> ・取材先企業の特徴や売りについて考える。 ・制作するCMのタイトルを考える。

WS「ワークシート」は別冊掲載



主体的にアイデアを出し合う



地域でのCM発表会



チームで協働してアイデアを形にする



市長の前で提言を発表

番号	実施時期	タイトル	内容
10	7月12日	地元企業の取材③	<ul style="list-style-type: none"> 取材先企業に出向きCMに磨きをかけるための取材を行う。 CM制作に必要なアイデアや情報がないか、前回とは違う方に話を聞いたりする。聞いた内容をメモにとる。次回の日時の約束をする。
11	7月19日	CM計画の発表とインターンシップ事前指導	<ul style="list-style-type: none"> 絵コンテを使って、USPやCMのテーマ、具体的な流れのイメージを発表する。発表は2班がペアになって互いに意見やアドバイスを伝え合う。 夏休みのインターンシップ(2日間)の日程の再確認と、インターンシップ先での注意事項などを聞く。 ※夏休み中にインターンシップ、CMの動画編集を行う。
【夏季休業】 <ul style="list-style-type: none"> ①企業取材 ②CM制作のための2日間インターンシップ（グループ5名同時に） ③CMの動画編集（高知工科大生のサポート） 			
12	8月30日	クラス発表	<ul style="list-style-type: none"> 夏休み中に完成したCMのクラス発表を行う。 企業紹介、自分たちがこだわったポイントを班長がPRする。 クラス代表4チームを選出し、学年発表に向けCMを修正させる。 ※コメントーターや教員からアドバイスをもらう。
13	9月6日	CM制作③発表準備	<ul style="list-style-type: none"> クラス発表の結果を踏まえてCMを修正し完成させる。
14	9月13日	学年発表 (クラス代表生徒による発表)	<ul style="list-style-type: none"> 各クラスからの代表作品を発表し、学年グランプリを決定する。 チームリーダーはUSPと力を入れた点を発表してからCMを流す。
地域発表	9月16日	地域発表 (全チーム発表)	全チームのCMを発表。企業の方々を招待する。商工会長、教育長、市長、高知新聞社 高本氏、株式会社電通 安田氏、学校地域協働本部運営委員長、高知工科大学地域共生センター長がCM大賞他各賞を決定し、表彰する。
15	9月20日	半年間のまとめ 評価表	<ul style="list-style-type: none"> 個人ワークにて半年間で学んだことの振り返り。 「ありがとうカード」の記入とグループワークにて学んだことの共有。 ルーブリック評価表への記入と教員との面談。

評価表 「ルーブリック評価表」は別冊掲載

Yell



熱量に動かされて

高知新聞社 地域報道部香長総局
楠瀬 健太氏

私はこの事業が始まったときから、山田高で継続的に取材をさせていただきました。まず印象的だったのは、濱田久美子校長先生を始めとした教員の方々や地域連携コーディネーターの浅野聡子さんらの熱量です。取材に行った際は皆さん取り組みの趣旨について目を輝かせて語ってくださり、

「よってたかって」子どもたちを育てるという強い思いを感じることができました。それが地域や行政の人たちを動かし、企業CMの制作と発表、市長や県知事への政策提言などにつながったのだと思います。

自分が高校生のころ、受験勉強は必死にやっていたが、地元の企業や課題などについて真剣に考えることはなかったです。生徒たちの「総合的な学習の時間」での活動は、将来県内にとどまっても県外に出ても、必ず人生のプラスになるはずです。

今後ますますの学校地域協働本部事業の発展をお祈りいたします。

1年生 [後期]

総合的な学習の時間

「協働する力・自ら考える力・発信する力を鍛える」

人口減少、産業衰退、テクノロジーに囲まれた生活、グローバル化…
 答えのない課題に納得解（≠正解）を出し続けなければならない社会に対応できる力を育てる。

目的

所属や立場を超えたどんな他者とも協働でき、自らの考えに基づいて
 社会をつくれる人材の育成

自ら課題を見つけ、他者と協働して考えをまとめ伝える「政策提言」

地元

クラスを超えたチーム

自ら考え動く

リアリティ

平成30年(2018)2月7日 香美市役所・香南市役所・南国市役所にて市長へ提言

5

まとめる
考える
再度
まとめる

実行可能か？ 伝わるか？

要望を提言へ昇華させる（実現可能性も追求する）。
 「誰を巻き込めばできる？」「コストはいくら必要？」
 「どのように伝えれば、実行したいと思ってもらえるか？」

12/13～1/24
 中間発表をうけて再考

プレゼンテーションの練習
 （本番は原稿なし）

1/31
 校内発表会

4

動く
考える

大学生とともに疑問点をとことん調べ、解決策を考える

自分たちの疑問から課題を設定、調べて考える。
 「あの人は知っているかも」「わからないなら聞いてみよう」

11/1～11/29
 自分たちで行動管理
 大学生メンターの支援
 授業では進捗報告

11/29
 校内中間発表

教員は進捗
 把握と見守り

3

ゴールを
イメージする

高校生がまちを作る事例・実物にふれる

茨城県境町の高校生提言について実際に話を聞く。
 「こんな事を2月にするんだな」「私たちにもできることなんだな」

10/21
 境町現役参与の講演（平成28年度）
 先輩の体験談を聴講

2

考える
理解する

まちづくり当事者との対話・アイデアを形にする

3市の行政担当から話を聞き、疑問点を聞く。
 「人口推移は？」「ウリは？」「何が課題？」「それはなぜ？」

10/25
 学校での対話
 質問を投げかけ理解する

メンター
 参加開始

1

知る
感じる

地元イベントへの参加・現状に触れる

なぜイベントをするのか？ 誰がどのように関わっているのか？
 「地元のために行動する人・仕組みを知る」「課題を肌で感じる」

9/17～10/30
 地元イベントへの参加
 気づきのまとめ

10/11
 地域課題解決に
 ついて学ぶ

番号	実施時期	タイトル	内容
16	10月4日	後期 オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・半年後に「つける力」のゴールイメージを共有。 ・先輩の提言ビデオを見せ、提言についてイメージさせる。 ・後期のチーム発表。 ※前期同様、チームメンバーはランダムに教員が決定。誰とでも一緒に協働できる力を育成するため、あえて生徒にはチームを決めさせない。 <ul style="list-style-type: none"> ・最終プレゼンについて、半年間の進め方の共有。 ・リーダー、サブリーダーを決める。
17	10月11日	アイスブレイキング	<ul style="list-style-type: none"> ・各市のテーマ発表。次時の市役所担当者の話を聞くに当たり、質問を考える。
18	10月25日	【各市の担当者来校】 市の課題について知る	【各市担当者とのグループワーク】 市ごとに分かれ、各市の担当者から、メモを取りながら話を聞く。予め考えてきた質問や、「自分のまちについて知っていること」「こうなったら良いと思うこと」などの意見を出し合いグループで情報交換する。
19	11月1日	ブレイン ストーミング	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにブレインストーミングのやり方を学び、実際にやってみる。 ・取り組む課題を決定する。 ・ブレインストーミングで思いつくことを出していく。 ①良いところ ②改善したいところ ③課題解決のアイデア
20	11月8日	発表のアウトライ ン作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合った課題設定や提言のアイデアをまとめる。
21	11月15日	【中間発表①】 (各市に分かれて実施) プレゼンテーション	課題設定・提言アイデアの発表 <ul style="list-style-type: none"> ・各チームの発表（3市4部屋に分かれる ※香美市2つ）。 ・メンター、地域連携コーディネーター、校長・教頭が1チームずつ質問やアドバイスをし、各チームに課題を持ち帰る（アドバイスのポイント：課題・提言の視点、高校生らしさ）。
22	11月22日	アイデアの改善	<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表でもらった意見やアドバイスを振り返り、アイデアを磨き上げる。話し合ったことをアウトラインに反映させる。
23	11月29日	絵コンテ作成	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントスライドの作成のコツを学ぶ。 ・アウトラインに基づいた発表スライドの絵コンテを作る。
24	12月13日	パワーポイント作成	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにパワーポイントスライドを作成する。
25	12月20日	【中間発表②】 (各市に分かれて実施) プレゼンテーション	提言のアウトラインの発表 <ul style="list-style-type: none"> ・各チームの発表（3市4部屋に分かれる ※香美市2つ）。 ・発表アウトライン、絵コンテの発表。 ・メンター、地域連携コーディネーター、校長・教頭が1チームずつ質問やアドバイスをする。 ・冬休みに取り組むべきことをチームで確認する。
26	1月10日	発表練習	<ul style="list-style-type: none"> ・原稿は作成するが、「原稿をできるだけ見ない」発表ができるように練習する。
27	1月24日	【リハーサル】 (各市に分かれて実施) プレゼンテーション	提言内容の発表 <ul style="list-style-type: none"> ・各チームの発表（3市4部屋に分かれる ※香美市2つ）。 ・地域メンター、校長・教頭、企画教員、地域連携コーディネーターが1グループずつ質問やアドバイスをし、各チームは指摘された点を修正する（アドバイスのポイント：プレゼンテーションの仕方）。
28	1月31日	提言準備	<ul style="list-style-type: none"> ・リハーサルでもらった意見やアドバイスを振り返り、発表を磨き上げる。
29	2月7日	市長への提案	<ul style="list-style-type: none"> ・香美市長、香南市長、南国市長に提案。
30	2月14日	半年間のまとめ① 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人ワークにて半年間で学んだことの振り返り。 ・「ありがとうカード」の記入とグループワークにて学んだことの共有。 ・ループリック評価表への記入。
31	2月21日	半年間のまとめ②	<ul style="list-style-type: none"> ・ループリック評価表を使った教員との面談で半年間の変化と成長を確認する。

2年生

総合的な学習の時間

「課題解決力の向上をめざす」

目的

課題設定力を身につけ、他者と協働しながら解決策を考え行動できる人材の育成

高知県の課題とわたしたち
～地域社会の未来を見据えて課題解決策を提案し、県庁で発表する～

課題解決力

チームで協働

高知県

キャリアとの接続性

平成30年(2018)2月9日 高知県庁にて高知県知事へ提言

5

まとめる
伝える

伝えるプレゼンテーションをする

ここまでの体験や学びをまとめ
「人を動かす」プレゼンテーションをする。

12/13～1/31

- 伝える資料作成
- 伝えるプレゼン練習

1/17
校内発表大会

4

検証する

解決策を自ら検証する

課題に対する解決策のアイデアを出す。
机の上ではなく、実体験を通して解決可能性を探る。

10/7

アイデアソン2の開催

8/30～11/29

課題と解決策の検証

大学生実行委員

ワールドカフェ
実地調査

3

仮説を立てる

課題を基に自ら動き、仮説を設定する

実際に課題を感じている人から話を聞いたり共に取り組んだりしながら、課題を確かめ仮説を設定する。

7/20～8/27(夏休み)

行政へのヒアリング

既存サービスの検証などのフィールドワーク

2

課題を確かめる

知事や県庁職員のお話を聞き、課題の現状を知る

知事や高知県の職員から課題の現状について話を聞き、考える。
気になっている課題について「直接」意見を聞く。

6/19

知事・県庁職員の講演

6/24

アイデアソン1の開催

7/12

県庁職員の講義

大学生実行委員

1

知る

高知県の課題を知る・わたしが気になる課題とは

高知県の課題について知り、自分の関心があるテーマを選定する。
「高知県の課題とわたしの接点」を見つける。

4/13～6/14

- 気になる課題の探究
- 課題設定とはなにか?

4/26
チーム発表

1チーム4人体制

番号	実施時期	タイトル	内容
1	4月13日	オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間の3年間の長期目的と2年次の目的について(校長より)。 1年間のプロジェクト計画について。 高知県の課題リストを配布、関心のある課題3つを選ぶ(あまり考えずに選んでOK)。
2	4月19日	課題の深掘りの練習①	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介を兼ねて、興味のある話題から「なんで」の質問を可能な限り繰り返し、どんどん掘り進めていく。 4人1組で項目に従った自己紹介を行い、話者に対して「なんで」の質問を繰り返す(自己紹介の内容例「趣味」「将来の夢、目標」「自分の長所、短所」等々)。
3	4月26日	課題の深掘りの練習② チームアイスペイキング	<ul style="list-style-type: none"> チームと課題の発表。 自分が興味を持った3つのテーマとそれぞれの選定理由を発表し、他のメンバーが気になる点について1つのテーマにつき5回の「なんで」質問(グループワーク)。
4	5月10日	【講演】 課題とは何か、 どのように 見つけるのか	<p>講師：いなかパイプ代表 佐々倉 玲於 氏</p> <p>理想、現状、課題、企画について知る。理想と現実の差を埋めるもの、現実を理想につなげるものが企画である。企画がプロジェクトになり、プロジェクトが事業になり、事業がビジネスになり、ビジネスで地域の課題を解決することができる。課題は地域で起こっている困っていること。「困っちゃうことない?」と話を聞いて掘り起こすことから始まる。</p>
5	5月17日	企画の考え方① WS	<ul style="list-style-type: none"> 前時の講演を受けて、企画の考え方を振り返る。既に記入している現状に対して、反対の状態を「理想」の欄に記入する。 →現状を掘り下げ、見えてくる課題を解決する企画を考える(個人ワーク)。 ※今後は必ず「企画」「現状(問題)」「理想」「課題」という言葉を使うことを心がける(計画、などの言葉は使用しない)。
6	5月24日	企画の考え方②	<ul style="list-style-type: none"> 前時に作成した理想の状態と現状の状態のワークシートを共有する。 「自分の関心のあるテーマ」でシートを記入する(個人ワーク)。 →自分の身の回りで起こっている問題や、「こうなったらいいのにな」という理想を書き出すように促す。
7	6月7日	課題への理解を 深める WS	<ul style="list-style-type: none"> 課題への理解を深める「なんでシート」を記入する。 →具体的、身近な体験に即した課題に落とし込むための準備ということを意識させる。
8	6月14日	課題の選定 WS	<ul style="list-style-type: none"> チーム内で他の人の「なんでシート」を読み、一番解決したい(おもしろそう、やりやすそう、気になるなど、どんな理由でもOK)と思う項目にマルをつける。 リーダーが司会進行で「探るワークシート」を埋めていくことで、高知県の課題を考え、仮設を立てていく。



主体的にアイデアを出し合う



尾崎知事の県政課題についての講演



アイデアソン①



県庁各課担当者から話を聞く

Yell



地域メンターとして自身も学んだ

高知開成専門学校
IT情報科公務員専攻 教員
丹生石 大介 氏

自らが生まれ育ったまちの課題を仲間とともに考え、自分たちなりの解決策を導き、首長に提言するという事……これから先の長い人生の中でも稀有な出来事だと思い、地域メンターとして参加させていただき、とても貴重な経験でした。

日が経つにつれ、「やらされ作業」から「やりたい作業」へと彼らが変わっていく姿は、遅くもあり、また確実に成長していると実感しました。

一方、地域メンターとして最も気を付けたことは、『プレゼンテーションの内容構成』、この1点です。まず「なぜ、このプレゼンテーションをするのか」、そして「どういう経緯でこの課題が発生したのか」、三現主義(現場に赴き、現物を見聞きし、現状を知る)に基づき、「課題解決のために高校生として、どのような貢献をしたいか」でした。

未来の高知を支える人材を育てる授業に携わることができ、自身も学習させていただいたと実感しています。

番号	実施時期	タイトル	内容
特別回	6月19日	【講演】 高知県の現状と課題について	講師：高知県知事 尾崎 正直 氏 尾崎知事は、南海トラフ地震対策や地産外商などについて高知県産業振興計画をもとに講演を行った。「持てる強みを生かし、無い物ねだりしない」「システム全体で課題を捉え、ボトルネックになっている部分を見抜く」など、課題解決策を考える際のポイントについてのお話もあった。 →知事の講演を聞き、事前に考えたテーマに関する質問をする。
9	6月21日	アイデアソンに向けて	・第1回アイデアソンについて説明と準備（アイデアソンとは：アイデアとマラソンからなる造語）。一人ひとりが出したアイデアを、チームで話し合いながらより良いアイデアにし、発表と話し合いを繰り返しながら面白いアイデアを生み出していく。時間をかけて普段話さない相手や仲間と対等な立場で一緒にアイデアを考えていくプロセスが重要。
特別回	6月24日 土曜日開催 (終日)	アイデアソン① WS	大学生実行委員によるアイデアソン ・テーマに関する理想の言語化とそれに対するアイデア出しをする。発表を繰り返しながら、アイデアを磨き上げていく（詳細は別冊資料を参照）。
10	6月28日	質問の考え方	・次週の県庁担当者の来校に向けて、質問の考え方について学び、自分たちのテーマに関する質問を考える ①相手を知る：質問をする上で、最も大切なことは相手がどのような取り組みをしているのかを知ること。 ②情報を知る：高知県産業振興計画冊子をよく読む。 ③質問を出す：冊子などで得た情報をもとに質問を考える。 ※注意：冊子に書いてあることや、相手が話した内容に質問の答えが書いてある場合は質問しない ④質問の優先順位をつける
11	7月12日	県庁各課担当者へのヒアリング	・県政課題に関する担当各課からの現状説明。 ・資料に目を通しつつ、重要だと思ふ情報をメモし、疑問に思うことをまとめる。ヒアリングし、課題に対する理解を深める。
12	7月19日	フィールドワーク準備	・県庁各課からの講義のまとめとフィールドワーク準備。 ・講義内容をメモしたヒアリング授業、ワークシートを参考に、振り返りシートを書く。 ・夏休みの活動について考える。 ・ワークシートに県庁の方からアドバイスされたフィールドワーク先を記入する。
【夏季休業】 フィールドワーク（実地体験調査）			
13	8月30日	中間発表	・フィールドワークの活動を発表、質疑応答。 ・最後にコーディネーター、担当教員が評価シートに基づき1番良かったチームを発表する。
14	9月6日	企画シート作成① WS	・フィールドワークをふまえ、現状、理想、アイデアの企画書を書く。 ・100本ノックワークシートを記入する。 →そのテーマに関する現状を100個ワークシートに記入してくる。
15	9月13日	企画シート作成②	・評価シートを用いて、グループの「現状、理想、アイデアシート」が基準を満たしているかを判定する。基準に達していない場合、100本ノックシートも用いて基準に達するものに仕上げる。
16	9月20日	ワールドカフェ WS	・ワールドカフェ（少人数で自由に気軽に対話できるようにした話し合いのやり方）。 ・1ピリオド5分間で、グループ毎に代表者の企画シートを元にしたプレゼンを聞き、内容に対しての質疑応答を行い、「良かった点」「こうしたら良いなと思った点（改善点）」を模造紙に記入する。自分のグループに役立つと思った情報をワールドカフェマニュアル裏面にメモする。ブースを移動しながら5回繰り返す。
17	10月4日	アイデアソンに向けて	・第2回アイデアソンへの準備。 ・アイデアソンの趣旨を理解する。アイデアソンへの準備として企画書を仕上げる。わからない点については地域連携コーディネーターや担当教員に訊く。

番号	実施時期	タイトル	内容
特別回	10月7日 土曜日開催 (終日)	アイデアソン② WS	大学生実行委員によるアイデアソン（高知工科大学キャンパスで実施） 目的：自分たちが本当に取り組みたいテーマに的を絞り、ストーリーとして一貫性のあるラフ企画を作る。 地域連携コーディネーター、担当教員、大学生に対するプレゼンテーションを繰り返しながら企画を磨き上げていく。（5人からOKをもらえたら合格）
18	10月11日	アイデアの具体化 WS	・アイデアソンで作成した「起承転結企画書」からアイデアをより具体的にイメージする（アイデア具現化の作成）。 ・アイデア実現までのストーリーを考える。
19	11月1日	アイデアの磨き上げ 絵コンテの作成①	・チームで話し合い、アイデアを磨き上げる。スライド作りのベースとなる絵コンテを作成する。地域連携コーディネーターや大学生に助言を受けながら進める。
20	11月8日	アイデアの磨き上げ 絵コンテの作成②	
21	11月15日	パワーポイント作成①	・絵コンテを基にパワーポイントのスライドを作成する。地域連携コーディネーターや大学生に助言を受けながら進める。
22	11月22日	パワーポイント作成②	
23	11月29日	パワーポイント作成③	
24	12月13日	パワーポイントの改善	・目標とするレベルのプレゼン動画を視聴し、その後そのプレゼンに関する解説を聞く。パワーポイントのスライドを改善する。
25	12月20日	中間発表	・7グループ（1グループ4～5チーム）に分かれて中間発表。 ・パワーポイントのスライドを印刷したものをういてプレゼンを行う。
26	1月17日	予選会	・8チーム4グループに分かれて発表し、知事に提言するチームを選考する。
27	1月19日	【講演】 相手を動かすプレゼンテーションの秘訣	講師：マイクロソフト社 西脇 資哲 氏 世界で評価されているプレゼンテーションを例に見ながら、人の心を動かすプレゼンテーションのコツについて学ぶ。パワーポイントの効果的な使い方や、ジェスチャーを交えた伝えるプレゼンテーションの方法について学習する。知事提言チームによるプレゼンについてアドバイスを受ける。
28	1月24日	提言準備①	・プレゼン磨き上げと県政課題提出資料作成。 ・パワーポイントの印刷資料を用いて、パワーポイントを修正、発表の練習を行う。
29	1月31日	提言準備②	
30	2月7日	提言	県庁正庁ホールにて、知事及び担当課職員に提言。発表しないチームはパワーポイント資料を各課に提出。
31	2月14日	振り返り① 評価表	アンケート回答とルーブリック評価の実施（自己評価をもとに面談）。
32	2月21日	振り返り②	1年を振り返っての感想と「ありがとうシート」の実施（自己評価をもとに面談）。



アイデアソン②



アイデアを伝えるプレゼンテーションの練習

マイクロソフト社 西脇様から
伝わるプレゼンテーションを学ぶ

尾崎知事への提言

生徒たちの振り返り

アンケート調査

「総合的な学習の時間」を通しての、生徒たちの「変化」「成長」を客観的に観察するため

*スキル：この授業を通してついた力

*マインド：地域への関心、キャリアへの関心、記述による「思い」

の2点についてアンケート調査を実施しました。

【実施日】

平成30年(2018)2月14日(水)、「授業の振り返り」として、1年生・2年生を対象にアンケート調査を実施。

【回答者数】

1年生 116人(生徒数128人 回答率90.6%)

2年生 114人(生徒数118人 回答率96.6%)

【アンケート内容】

【Q1】 身についたと思う力を4段階(そう思う・どちらかと言えばそう思う・どちらかと言えばそう思わない・そう思わない)で評価する。

▶ **1年生**：入学時の自分と今の自分を比較して

「取材編集力」3、「協働性」3、「発信力」3、「自主性」3、「地域との関わり」2の計14項目

▶ **2年生**：2年前の自分(入学時)と今の自分とを比較して

「課題設定力」3、「協働性」3、「プレゼン能力」3、「主体性」3、「地域の関わり」2の計14項目

【Q2】 この1年間の総合的な学習の時間の中で、一番印象的な授業を1つ選ぶ。

【Q3】 上で選んだ授業について、なぜ印象的だったか、どんな経験をしたか、何を思ったかを具体的に記述する。

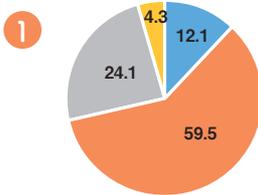
1年生アンケート集計結果

【Q1】 下記の(1)～(14)の質問に対して、入学時と今の自分を比較したときに、「そう思う」なら「4」を、「そう思わない」なら「1」を選んでください。

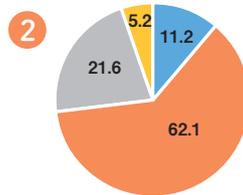
■ そう思う ■ どちらかと言うとそう思う ■ どちらかと言うとそう思わない ■ そう思わない

数値は%

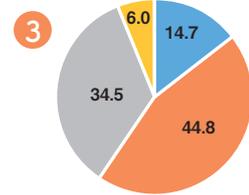
【取材編集力】



人から聞いた内容をまわりの人にも
分りやすく説明できるようになった

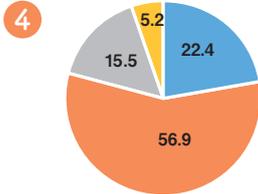


話の要点をまとめられるようになった

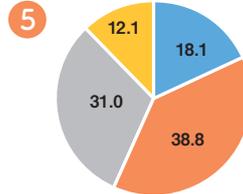


質問が以前よりできるようになった

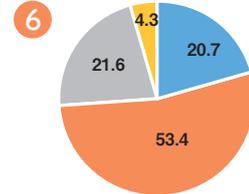
【協働性】



親しくない人ともコミュニケーション
をとることができるようになった

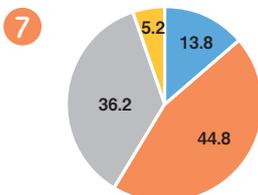


相手と意見を交換したり、考えを
ぶつけ合うことが楽しくなった

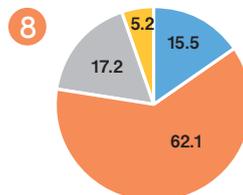


仲間が困っている時や自分が苦
しい時に、力を貸したりサポート
を求められるようになった

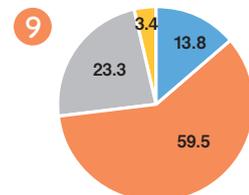
【発信力】



自分の思いを誰にでも伝えられ
るようになった

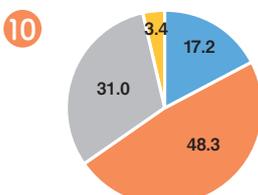


自分の思いを「どうすれば相手が理解し
やすいか」を意識し伝えるようになった

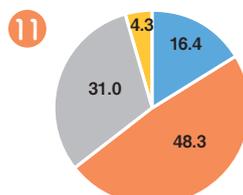


一番伝えたいことを整理して伝え
られるようになった

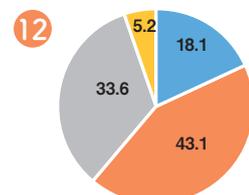
【自主性】



予定を立てて計画を進められる
ようになった

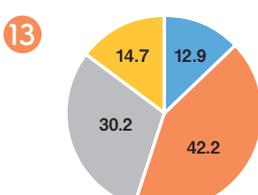


率先して行動することができるよ
うになった

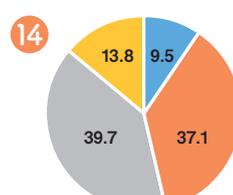


自分から周りに提案し、行動で
きるようになった

【地域との関わり】



自分の地域の会社や
イベントのニュースに敏
感になった



将来的に地域に残り、
仕事がしたいと思うよ
うになった

【Q2】 この1年間の総合的な学習の時間の中で、一番印象的な授業は何でしたか？
下記の中から一つ選んで数字に○をつけてください。

上位5位

順位	授業名	人数	%
1	【2月7日】提言発表	42	36.2
2	【8月】インターンシップ	37	31.9
3	パワーポイントの作成	11	9.5
4	【8月】企業取材	8	6.9
5	ありがとうカード	5	4.3

【Q3】 Q2について、なぜ印象的だったのか、どんな経験をしたか、何を思ったかなどを具体的に教えてください。

(抜粋)

【2月7日】提言発表

- ・案を考える事で自分の住む市の良いところも悪いところも知る事ができた。
- ・今までやってきて良かったと思えた。提言が実現すればいいと思う。
- ・CM発表とは違った達成感があり、とても楽しかった。
- ・人前で話す事が好き。発表中にもっとこうすれば良かったと考えた。2年生になってからの発表では高校生らしい新しく斬新なアイデアで沢山の人を驚かせたいし、楽しませたい。
- ・市長さん達から意見をもらい自分達に足りないものに気付く事ができた。
- ・地域は自分達で変えていけるのだと強く実感した。
- ・もっと他の市の提言を聞いて、他の市のことも知りたいと思った。

【8月】インターンシップ

- ・お客さんとのコミュニケーションが特に難しかったが、見ず知らずの人と話せるようになった。
- ・何より楽しかった。またやりたい。
- ・インターン先が毎日通いたい程ホッとする場所になり、お別れが寂しかった。
- ・話を聞くだけでなく一緒に仕事をしながら関わる事ができ新鮮だった。
- ・仕事での努力は無駄になることはない、どの仕事にもやりがいがある。
- ・地域に根ざした生き方も良いなと感じられた。

パワーポイントの作成

- ・パワーポイントの作成を通じて知らない相手と打ち解け仲良くなれた。
- ・ダメだしされた部分をどのように変えるのか考えることが大変だった。
- ・他人と関わる事が苦手だったが、パワーポイント作成を通じて「手伝って」や「どうしたらいい」などを伝えられるようになった。
- ・大学生にアドバイスをもらって良いパワーポイントが作成できた。

【8月】企業取材

- ・あまり喋ったことのない友と協力してCMを作る貴重な経験ができてよかった。
- ・自分の考え、やりたい事を他人に伝えられるようになった。
- ・取材する前に自分達で調べていた内容とは違うことを知る事ができ刺激的だった。

ありがとうカード

- ・振り返りを通じて、この人がチームメイトで良かったと感じられた。
- ・カードにすることで素直になれた。
- ・ありがとうカードを書くことで思いが1つになると感じられた。

1年生アンケート分析レポート

調査のポイント

山田高校1年生（128人）を対象に1年間の「総合的な学習の時間」でどれだけ成長できたかをアンケートにより調査し、116人の回答を得た。ここでは次の4つのスキルと1つのマインドについて、生徒の自己評価から成長の変化を見る。

【4つのスキル】

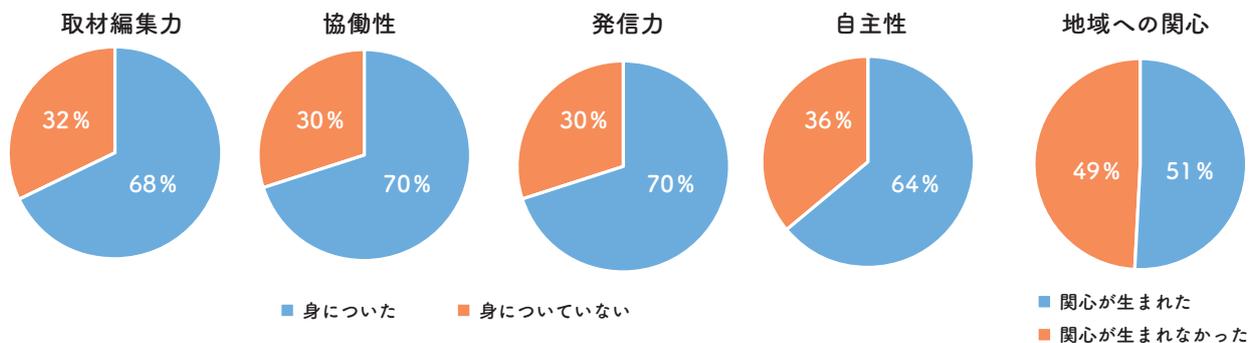
- ・取材編集力／集めた情報を分りやすく関連させながら編集する力。
得た情報を基に更に疑問を抱き質問する力。
- ・協働性／複数人と協力しながら物事を進めていく力。
自分の事だけでなくグループ内のメンバーにも目を向ける力。
- ・発信力／得た情報や考えた事を相手に伝わりやすい手段や話し方を考える力。
誰に何を最も伝えたいかを整理し伝えられる力。
- ・自主性／他人から指示される前に自ら行動を起こす力。

【1つのマインド】

- ・地域への関心／自分の住む地域に対し、関心や愛着が増したか。

身についた力

14の質問の回答を、「そう思う」「どちらかと言うとそう思う」を「身についた」とし、「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」を「身についていない」として、項目毎に集計したものが次の円グラフである。



1年生全体で見ると、取材編集力、協働性、発信力は約7割の生徒が身についていると感じている。

特に協働性と発信力は、パワーポイント等の発表資料の作成をしたり、中間発表や提言発表をしたりすることにより、このような結果が得られたのではないかと考えられる。

また地域への関心については、約半数の生徒が高まったと感じている。

印象的な授業から見えること

1年間で最も印象的な授業について質問すると、1位には2月7日に3市で行われた提言発表、2位は8月のインターンシップが挙げられている。次にパワーポイントの作成、8月の企業取材、ありがとうカードと続くが、1位から5位に選ばれたのは全て、生徒達が動く参加型の授業であった事が分かる。

提言発表については「自分の住む市のことを考えることができた」「提言が実現すればいいなと思う」「休日登校しての作業も楽しかった」などのポジティブな感想がほとんどであった。また「自分の市のことを考えることができた」「地域の課題解決に率先して関わっていきたいと思えた」「地域は自分たちで変えていけるのだと強く実感した」というコメントも見られ、地域への思いを育み地域への関心の向上に繋がっていることがうかがえる。

インターンシップは生徒にとって新鮮な授業であったようだ。地域の大人たちと共に働くことで、働くことへのイメージが変わった生徒や、地域に根ざした生き方に魅力を感じた生徒が見られる。「イメージと違い、自分もここで働いてみたいと感じた」「インターン先が毎日通いたい程ホッとする場所になり、お別れが寂しかった」とのコメントがあり、インターンシップで出会った地元企業が生徒に地域への愛着、興味を誘発したのではないかと考えられる。

パワーポイントの作成については、「大学生にアドバイスをもらって良いパワーポイントができた」と満足感を述べたもの、また作成を通してチームメンバー内で「打ち解け仲良くなった」「他人と関わることが苦手だったが、『手伝って』『どうしたらいい』などを伝えられるようになった」とチームワークが生み出される過程がよかったと述べたコメントがあった。

8月の企業取材では、「人間関係ができた」「自分の考え、やりたい事を他人に伝えられるようになった」など、コミュニケーション力がついたことがうかがえる。

「ありがとうカード」は自分の思いを相手に伝えるという取り組みだが、チームメンバーから感謝の気持ちをもたらすことは嬉しいことであり、チームの一員としてお互いを認め合い、チームワークの醸成につながっていると考えられる。

また、「2年生になってからの発表では、高校生らしい、新しく斬新なアイデアで沢山の人を驚かせたり楽しませたりしたい」「またやりたい」といった来年度の総合的な学習の時間を楽しみにしているというコメントがあった。来年度の総合的な学習の時間に期待を抱く生徒がいることは、大きな成果だと言えるのではないだろうか。

■生徒達のコメントを通して

生徒達のコメントからうかがえることは、総合的な学習の時間を通じてコミュニケーション能力が身につけている点である。ある生徒は「以前は他人と関わることが苦手だったが、パワーポイントの作成を通じて意見の交換が以前より活発にできるようになった」とコメントしている。

高校1年生にとって同級生と協力しながら目標達成に向かって行動していくことは並大抵の事ではない。仲間と行動していく中で自主的に行動していこうとする姿勢は、アンケートの結果からだけではなく、総合的な学習の時間の中でも見ることができた。また、「足りないものがどんなふうにも足りないかを知り、改善することができた」「発表時に聞き手と目を合わせることができず悔しかった」など、自分達に足りないものや悔しい思いに気づけた生徒がいることも、この課題探究学習の大きな収穫ではないだろうか。

アンケートに回答することで生徒達は1年間を振り返りながら、自己の成長を改めて感じられたのではないだろうか。来年度の取り組みでは、入学時と前期の終わり、後期の終わりの3回にわたりアンケートを実施し比較する事で、より細かく生徒の成長を確認し、課題探究学習プログラムに反映させていくことができるのではないかと考える。

今年度の総合的な学習の時間では生徒128人に対し地域連携コーディネーター2人、11月から大学生メンター2～4人が教室に入り授業を進めたが、特に意欲の低下した生徒への働きかけが十分できていたかという点にも注目する必要がある。教員だけではなく、地域連携コーディネーターや大学生メンターがより生徒と交流を密に行い対応していくことで、生徒達が力を身につけることに繋がるのではないだろうか。

(レポート：地域連携コーディネーター 吉田 美遊)

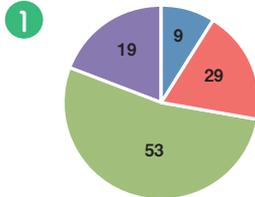
2年生アンケート集計結果

【Q1】 下記の(1)～(14)の質問に対して、2年前の自分(入学時)と今の自分を比較したときに、「そう思う」なら「4」に、「そう思わない」なら「1」を選んでください。

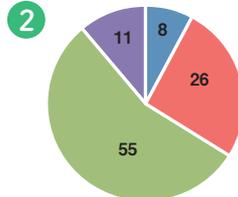
■ そう思う ■ どちらかと言うとそう思う ■ どちらかと言うとそう思わない ■ そう思わない

【課題設定力】

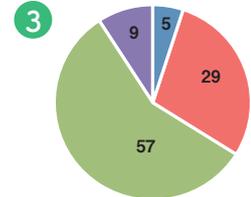
数値は%



自分の興味がわいた分野について自主的に調べるようになった

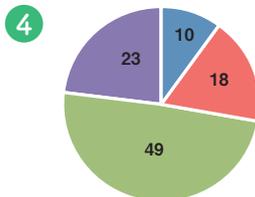


日常の何気ないことでも「なんでだろう」と疑問に思うことが増えた

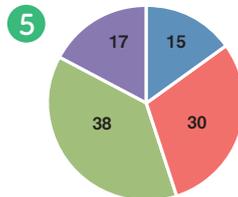


現在起きている問題について「これが原因かもしれない」と仮説を立てられるようになった

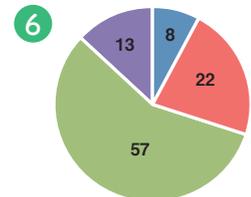
【協働性】



親しくない人ともコミュニケーションをとることができるようになった

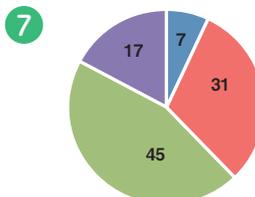


相手と意見を交換したり、考えをぶつけ合うことが楽しくなった

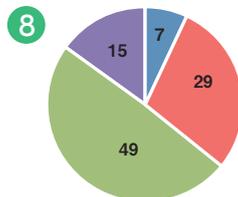


仲間が困っている時や自分が苦しい時に、力を貸したりサポートを求められるようになった

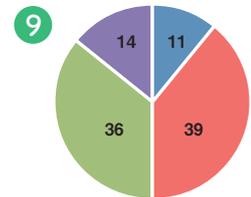
【プレゼン能力】



自分の考えを相手に伝える能力が向上した

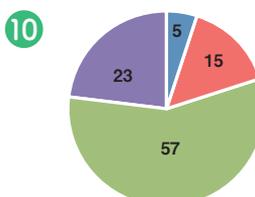


プレゼンを作る際に「どうすれば相手が理解しやすいか」を意識し工夫するようになった

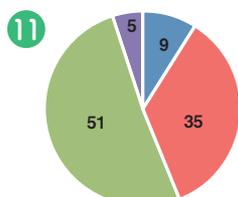


人の前に立ち、自分の考えや意見を発表することができるようになった

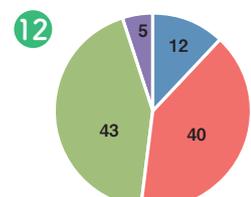
【主体性】



自分の将来について真剣に考え、それに関する情報を収集するようになった

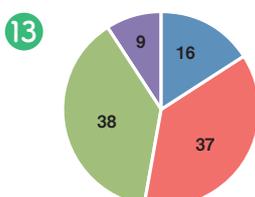


周りに率先して行動することができるようになった

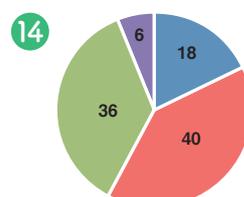


自分から周りに提案し、実際に実行できるようになった

【地域への愛着】



将来的に地域に残り、仕事がしたいと思うようになった



自分の地域の会社やイベントのニュースに敏感になった

【Q2】 この1年間の総合的な学習の時間の中で、一番印象的な授業は何でしたか？
下記の中から一つ選んで、数字に丸をつけてください。

上位5位

順位	授業名	人数	%
1	【10月7日】ワクワクしようゼアイデアソン2（土曜日に大学生と高知工科大学で行ったイベント）	33	28.9
2	【2月9日】正庁ホールでの発表	31	27.2
3	【1月19日】西脇資哲さんご講演（相手を動かすプレゼンテーションの秘訣）	13	11.4
4	【6月24日】ワクワクしようゼアイデアソン（土曜日に大学生とアリーナで行ったイベント）	11	9.6
5	【11月、12月、1月】パワーポイント・発表資料を作成する授業	7	6.1

【Q3】 Q2について、なぜ印象的だったのか、どんな経験をしたか、何を思ったかなどを具体的に教えてください。

(抜粋)

【10月7日】ワクワクしようゼアイデアソン2

- 学校ですのと違って私服でいつもと雰囲気が変わり、意見が出やすかったかなって思った。いっぱい意見が出た。みんな意見を出しやすい雰囲気、その出された意見に相槌を打ちながら聞いていて良かった。
- 大学生と一緒に考えたり、アドバイスを聞いたりしてほんとにためになる！先生側とは違う意見が聞けて本当のためになったし、親身になって考えてくれてほんまに助かった。実際大学に行って大学生に教えてもらうことは、あまりない機会だから、一番それが印象に残ったし、自分がチームの人と一緒に一番頑張ってきたところ。
- 抽象的な解決策を大学生メンターさんとの話し合いで具体的にしていって作業が楽しかったです。私服で大学に行ったので、大学生になった時の雰囲気を味わうことができた。

【2月9日】正庁ホールでの発表

- 私の班は県庁で発表することはできなかったけど、他の班が発表しているのを見ると、みんなよく考えているなと思うプレゼンでした。県知事に見せて意見を頂くことはどの学校へ行ってもなかなか経験できないと思います。こんなことができるのは山田高校だからだと思います。私は山田高校普通科にいたからこそ、貴重な経験をすることができたと思い、改めて自分の学校に誇りを持つことができました。パワポを作成する日はとても長くてしんどいと思っていましたが、自分たちが一生懸命やったことが人から評価されることが嬉しかったです。
- 尾崎県知事が山田高校の発表を聞いてくれて嬉しかった。是非アイデアとして使ってほしい。
- 知事の前で発表することはめったにないことだしとても緊張した。発表するにあたりどこに問題があるか、どうしたらその問題を解決し高知が良くなるかを考えることで高知の現在の状況を把握できました。この提言で高知が良くなったらいいと思う。

【1月19日】西脇資哲さんご講演

- 西脇さんの講演はすごくおもしろかった。プレゼンを教えてくれて西脇さんもさすがという感じだった。とてもおもしろくて、聞き入ってしまった。いままで色々な講演を聞いたけどダントツで面白かったと思う。県知事にプレゼンをする僕達にとってもわかりやすくプレゼンの仕方を教えてくれて、その一つ一つがとてもためになることばかりだった。またこういう面白い人の講演が聞きたい。
- 相手に伝わる発表の仕方を教えていただいた時、プレゼンだけでなく日常生活でも役立つことだなと思いました。進路のことで親を説得する時や自分の考えを文章にする時なんか役に立ちそうだなと思ったので、集中して聞いていた覚えがあります。とても印象的でした。

【6月24日】ワクワクしようゼアイデアソン

- 班のみんなと体育館に集まって留学のことについて楽しみながらアイデアを出した。大学生と一緒に、今の留学の現状についてじっくりと考え、最初は意見が出なかったけれど1人が出したらどんどん良いアイデアがで良いスタートが切れて楽しかった。

【11月、12月、1月】パワーポイント・発表資料を作成する授業

- パワーポイントを使用することで将来役に立つものだなと思った。またプレゼンというものは大人になっても使用するものであり、勉強してみようと感じた。将来のことを考えながらプレゼンの仕方を調べ、大人になってからの対策を身に付けておくことが重要だなと思った。

2年生アンケート分析レポート

■ 調査のポイント

山田高校2年生（118人）を対象に1年間の「総合的な学習の時間」でどれだけ成長できたかをアンケートにより調査し、114人の回答を得た。ここでは次の4つのスキルと2つのマインドについて、生徒の自己評価から成長の変化を見る。

【4つのスキル】

- ・ **課題設定力**／現在起こっている問題について自分から疑問を持ち、その疑問を探究する力。
学習時間内だけでなく、日常生活においても様々な分野について「なぜ」と疑問を持つ力。
- ・ **協働性**／親しい友人関係でなくても同じ目的のもとに協働する力。
チーム内で議論したり、サポートする力。
- ・ **プレゼン能力**／単なる紹介ではなく、自分の考えを相手に理解させるために工夫する力。
人前でも堂々と自分の意見を発表する力。
- ・ **主体性**／周りに率先し自立した行動や選択をする力。
自分の将来を自らの経験や意思で考え決定する力。

【2つのマインド】

- ・ **地域への愛着**／自分の住む地域のニュースに関心を持つ。
将来的に地域に残り仕事をしたいと考える。
- ・ **キャリアへの関心**／自分の将来について真剣に考え、それに関する情報を収集する。

■ 身についた力

14の質問を作成し、「そう思う＝4」「どちらかと言うとそう思う＝3」「どちらかと言うとそう思わない＝2」「そう思わない＝1」という数字を当てて合計し、平均点を下の表にした。各項目への評価ポイントが中間点である2.5を上回っていれば「身についた」、下回っていれば「身につけてない」と判断する。

また、全体の集計の他に、男子と女子、県庁正庁ホールで知事提言を行ったチームとそうでないチームの切り口でも集計を行った。

[評価の平均点の比較]

() は人数	課題設定力	協働性	プレゼン能力	主体性	地域への愛着	キャリアへの関心
全体 (114)	2.74	2.71	2.65	2.64	2.36	2.97
男 (51)	2.82	2.65	2.71	2.61	2.41	2.88
女 (63)	2.68	2.77	2.59	2.66	2.31	3.05
非提言チーム (86)	2.70	2.70	2.56	2.60	2.35	2.95
提言チーム (28)	2.87	2.75	2.92	2.76	2.38	3.39

全体では「課題設定力」「協働性」「プレゼン能力」「主体性」「キャリアへの関心」が2.5を上回っており、この授業がこれらのスキル・マインドの向上に寄与したと考えられる。

中でも最もポイントが高かったのが「キャリアへの関心」であり、79.8%（91人）の生徒が肯定的にとらえている。学校での探究活動だけでなく、地域や大学という高校とは違った環境で学習することが、生徒自身の世界を広げ、キャリアを真剣に考えたり、それに関する情報収集したりするきっかけとなったようだ。

「地域への愛着」については、2.5をやや下回る結果となった。これは1年生のときに比べるとカリキュラムの都合上、地域との関りが薄くなったことが原因と考えられる。しかし、フィールドワークなどの課題探究の場面においてさらに地域と密に関わったり、成果発表を県庁だけでなく地域でも行うことで、さらに地域との関わりを増やすことができ、地域への愛着が醸成されると考えられる。

■男女別に見ると

男女間でも差が出た。

男子は「課題設定力」「プレゼン能力」「地域への愛着」を女子よりも高く評価したのに対し、女子は「協働性」「主体性」「キャリアへの関心」を男子よりも高く評価した。

女子が「主体性」「キャリアへの関心」がよく身についたと答えたことは、女子の方が自立や将来のことをよく考えており、思春期での成長の差が表れたのかもしれない。

■提言を行った生徒

県庁正庁ホールで知事に提言を行った生徒（28人）は、全ての項目の得点において提言を行わなかった生徒を上回っている。特に「プレゼン能力」と「キャリアへの関心」への評価が高かった。

プレゼン能力に関しては、知事への発表に向けてプレゼン練習を重ねた結果だろう。大きな舞台での発表がプレゼン能力の向上に大きく寄与すると考えられ、地域でも新たに発表の機会を設けたり、校内発表の際にもその発表を録画しYouTubeにアップロードし社会へ広く提言を行ったりすることが、プレゼン能力に関して能力と自信の向上を図ることに繋がると考えられる。

また、知事提言を行った生徒は、県庁という高校とは異なる環境を存分に味わった。その経験が自身の将来を考える上でも大きな刺激となり、キャリアへの関心の高さに繋がっていると言える。

■印象的な授業から見える事

「2年時の総合的な学習の時間の中で一番印象的な授業は何でしたか？」という質問とその理由を自由記述にて回答してもらった。

1位はアイデアソン2が選ばれた。高知工科大香美キャンパス内で行い、私服の参加も可という自由な雰囲気のあるユニークな設定が印象深さにつながったと考えられる。「大学生の雰囲気が味わえた」というコメントも多く見られ、この授業が課題探究やアイデア創出の場だけでなく、オープンキャンパスのような役割も果たし、その結果としてキャリアへの関心の評価の高さに繋がっているのではないだろうか。また、「意見が出やすい雰囲気があった」「大学生のおかげでアイデアをまとめることができた」「OKをもらうために何度もアイデアを練り直したのが大変だったが楽しかった」などポジティブな意見が多く、アイデアを出し合ったり、議論することを楽しめた生徒が多かったようだ。はじめは土曜日開催という事で不満も多かったが、やり始めると熱が入ったという生徒も多く、自分の得意や好きを見つけられる授業であったとも言える。

必ずしも自主的な生徒ばかりでない中でのワークショップを行う場合には、新鮮な環境で実施するとともに、生徒が自主的に動けるように考え方や行動の範囲にある程度の自由度を設ける必要があると考える。

2位に挙げられた「正庁ホールでの提言」は、知事提言をできなかった生徒も最も印象的な授業として選んでおり、自分たちよりもレベルの高い発表を見て「勉強になった」「参考になった」と良い刺激を受けたようだ。中でも「提言チームの熱さには負けたと思った」というコメントが印象的であった。得てして点数などの数字による評価で、序列が決まりやすい学校教育において、その姿勢や熱量に対して「敵わない」と感じることは、非常に貴重な経験だろう。先生方は、知事の質問に対して堂々とスラスラと答える生徒に驚いたそうである。確かな努力を積み重ね、自分たちの企画に自信があったからこそその成果であると言える。

3位に挙げられた日本マイクロソフト社の西脇資哲氏による講演は、「総合の授業以外の講演を含めても一番面白かった」という声が多かった。特に提言を行ったチームにとっては非常に良い勉強となったようで、ほとんどのチームにおいて西脇氏に教わった「ズームを使いデータを強調する」「身振り手振りを交える」という工夫を取り入れていた。それ以外の生徒においても実生活においても役立つと感じられる講演であったようで、大きな学びとなった。

（レポート：地域連携コーディネーター 板原 慶典）



ありがとうカード

総合的な学習の時間を振り返る授業では、チームメンバーの一人ひとりに感謝の気持ちを込めたコメントを贈り合いました。

提言、お疲れ様でした。うちのチームは、僕とKさんが毎回のごとく暴走し、Mさんのツッコミが不在だった5、今後死んでしまった常識人として、あるときはチームのブレイクとして頑張ってくれたMさんには本当に感謝しています。憧れぬ発表も頑張りました。本当に、ありがとう。

班長として目を引いてくれてありがとう！
パワポの制作や発表もしっかりできていたので良かったです。

自分へ
頑張った、最後まで修正して、パワポを仕上げたから、賞も取れたね！
おつかれ様です。

リーダーだったのでいろいろ大変だったと思うけどみんなをまとめられてありがとう。
あと発表上手かった。

当日、発表の文を覚えて発表してくれてありがとう😊
堂口としていてよかったです。

ボランティアとか大変だったけど一緒にできてとても良かったです。
放課後も遅くまで残ってくれたり、わからないことがあると教えてくれたり、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

提言お疲れ！楽しかった、と一言で言うには、いろいろと大変なこともあったけど、11月のおかげで何とか成功できたお、本当にありがとう。
私達は度々暴走しましたが、愚痴もたくさん言いありました、でも本当に楽しかった。マンが最後まで、体調くずしてまで頑張ってくれました。本当にありがとう。Kさんは最高のリーダーです。

積極的にやってくれたり
レコモ記録を取ってくれて
あ、リ、カ、ヒ、ウ、の
賞取れてよかったね😊

山高生が羨ましい
福田 龍星
 (マネジメント学部4年)



僕がこのプロジェクトに初めて参加したのは、大学3年生だった2年前でした。初めて山田高校を訪れた時に感じたことは今でも忘れません。学校の先生方、そして地域連携コーディネーターの皆さんの「本気度」がオーラとして目に見えてしまいそうなくらい、熱く、真っ直ぐだったからです。

最初は慣れないことに戸惑い、時には困り果てながらも、なんとかチームで進んできた高校生達は、今では見違えるくらい頼もしくなりました。

今、このプロジェクトは香美市だけでなく高知県民全体が期待を寄せる取り組みになっています。高校生達はそのことに気づいているはずですが、自分たちが高知県の未来を担う存在であるということ、そして自分たちのプロジェクトが高知県の未来をより良くできるものであるということ。彼らが気づいた「当事者意識」というものが地域活性において最も大切な事だと思えます。16、17歳でこのレベルの学習を行っている山田高生達が羨ましいです(笑)。

**生徒の思いを
形にしていく存在**
片田 有衣子
 (マネジメント学部4年)



生徒達はこの授業を通してネットを使う力だけでなく、コミュニケーション能力や、考えを磨いていく力、思いを表現する力を身に付けていることが、接していく中でよくわかります。

一人の生徒と話していると、文字には表現できていない企画に対する自分の思い(企画立案の動機、明確なターゲット像等)を細かく言葉で表現してくれたことがありました。助言を与えて、新しくできた企画内容は、生徒の思いが反映されたとても良い仕上がりになっており、生徒自身も満足していました。生徒達が企画に対して色々な思いを持っていることにとっても感心しましたし、こういった生徒達の思いを、形のないものから形のあるものにしていく存在が非常に大切だと再認識することができました。

生徒達が身に付けた力や、関わった人との思い出、取り組んだ地域の課題は、確実にこれからの進路に役立つと思います。これからもこの事業が益々発展していくことを楽しみにしています。

「よってたかって」
yell
 高知工科大学生「メンター」

**高校生の
一生懸命な姿勢を
アシスト**
乾 有志
 (マネジメント学部2年)



私は2017年11月から参加しました。メンターとしてアドバイスするのは初めてで、また高校生とも関わるのは初めてだったので、お互いに戸惑ったりもしました。

高校生で初めて企画を自分たちで考え、地域活性化するためのアイデアを考えるのはとても大変なのに、一生懸命考えようとする姿勢が伝わってきました。私たち大学生はそのアシストをするために、自分たちの知識を用いて、高校生たちと一緒に作ってきました。

1週間に1度しか関わることができなかったので、高校生も企画書を作るのは大変だったと思うのですが、毎週すごく良くなって、頑張りが伝わってきました。提言発表の日が近づくにつれて、内容もよりワクワクし実現可能になってきていたので、今後ますます楽しみです。

もっと役に立ちたい
尾上 夏菜
 (マネジメント学部4年)



山田高校の皆さんと接していると、人や地域を思いやれる子、自分たちのアイデアの説得力を鋭い切り口から強められる子など、素敵な思考を持った子がたくさんいるなと思います。

メンターとして自分たちがその良い感性を生かしてあげられているのかいつも不安ですが、「先生」や「師匠」と呼んでいろいろ聞いてくれる子たちがいて、その子たちのためにもっと役に立ちたいとやる気が出てきます。この活動で私たち大学生は、少し自分に自信がついたり、目標ができたりして、大学生活が豊かになっていると思います。

高校生にとってもそうであるために、私たちは高校生の皆さんの「やってみよう」や「もっとこんなふうになったらいいのに」という気持ちを開放させてあげられるような、関係性と環境をこれからも築いていけたらいいなと思います。

地域連携コーディネーターがつなぎ役

このプログラムになくてはならない存在が《地域連携コーディネーター》。しかし、マニュアルもなければ、正解もありません。2年目の今年度は5人のチームで取り組みました。それぞれの振り返りの中から見えてくる《コーディネーター》の姿とは……。



吉田 美遊

長吉 真吾

浅野 聡子

溝渕 知秀

板原 慶典

「走りながら考える、新しい役割」

浅野 聡子（株式会社 StoryCrew）

始まりは2016年3月。ちょうど起業をした月でした。「山田高校の濱田校長が、浅野さんに一度会いたいと言ってるんだけど」と前職の先輩から電話を頂きました。高校の校舎に入るのも、自分が母校を卒業した時以来。懐かしくもあり、一体自分が高校で何をできるのだろうか？という期待と不安を感じていました。

迎えてくださった濱田先生は、爽やかでオシャレで情熱的、そして何よりも本質的。既存の学校教育のサポート、というお話ではなく、「人生100年時代を生き抜き、地域を育てる社会人をどう育てるか」というスケールの大きなお話だったことがとても印象に残っています。だからこそ、これまで教育に関わる機会がなかった私でも大変共感でき、あっという間に「やりたい」という気持ちが湧いてきたのだと思います。

4月から、地域と学校をつなぐ地域連携コーディネーターとして毎週水曜日に学校で活動するようになりました。学校としても初めての取り組みで、行政関係者、地域企業、学校教員といった多岐にわたる人々を、土佐山田の地域についても山田高校についても全く知らない私がつないでいく。本当に手探りででした。

校長先生から長年の教育現場で見てきた現状とこれからの教育に必要なこと、1年後に理想とする生徒の状態、地域でやってみたい事をじっくりとお伺いした上で、それを1年間の授業計画に落とし込みました。

その後は、先生方と毎回の授業時間の使い方や進め方を作り、授業後には丁寧に振り返りました。研修企画部長の竹内先生と、1年団学年主任の島崎先生、2年団学年主任の助村先生がその他の先生方のハブとなってくださり、私は各授業にご協力いただく学校外の方々への説明や大学生メンターとの予定調整を担当。2年目には4名の地域連携コーディネーターが加わり、校内外の協力者も一気に増え、取り組みは大きく広がっていきました。

必ず実践したことは、生徒や校内外の関係者の反応に耳を傾けながら、それを校長、教頭、企画部長、学年主任、地域連携コーディネーターで共有し合い、伝え方や進め方を進化させること。理想の状態に向けて妥協なく、時に激しく議論し、それぞれの立場や状況のみに囚われることなく、何度も円陣を組み「走りながら考える」を実践すること。これらが最も大事だと思います。生徒に育みたい「主体性」と「協働性」を磨き、挑んでいるのは、間違いなく大人たちです（笑）。

その中で、地域連携コーディネーターがどのような存在でいるとスムーズだったか。私の体験では、たった1

つの意識が重要だと感じています。それは、「目的意識を誰よりも強く持ち続ける」ということ。30年後の成熟した地域社会で、人間にしかできない仕事ができる人材を育成する。主体的に考え、仲間と協働し、答えのない課題に挑みながら地域の未来を創る人材を、この地域の大人が「よってたかって」育てること。それによって地域も育つこと。この共通目的に誰よりも多く、強く立ち返り、様々なシーンで関係者に熱を持って伝えられるか。

これが一番重要なことだと感じました。

社会は多様な役割や状況、歴史や経験を持った人々で成り立っています。そのど真ん中に立ち、最終目的という大旗を掲げて人々の共感を生み、行動を促し、感謝する。単なる調整役ではなく、“あえて”どこにも属さない、新しい役割。それが地域連携コーディネーターであると、土佐山田の皆さんが教えていただきました。

平成29(2017)年度

【1年生担当】

「生徒にとって一番近い存在で」

吉田 美遊（高知工科大学4年）

わたしは先生よりは生徒と年も近いので仲良くして、だからこそ言えるコメントをしてあげよう、生徒にとって一番近い存在で近所のお姉さんみたいな感じでいようと心掛けていて、実際「お姉さん」と呼ばれていました。

コメントするときはオンオフ切り替えになるけど、1年生はしっかり聞いてくれて、わたしから出たコメントをちゃんと反映させようとしていました。生徒の意見には「ダメ」とは絶対言わないようにして、「いいと思うけど、こうしたらもっと面白いんじゃない」と言う。生徒たちは考える機会が多かったかもしれません。

就職活動をしながらで、全部に関わることができませんでした。久しぶりに行くと、資料に目を通したりはするけど体感して得るものがないため、最初ドキドキします。今日はどんな感じでいこうかなとすごく考えるけど、正解がない。ある意味全部正解だし、間違いなのかもしれませんが、その時々はどう対応していくかを考えるのは結構大変でした。

作業が遅れると浅野さんが「順調ですか？」と声掛けしてくれたり、私より先に外部の方から連絡をくださったりすることもありました。しっかりしなくてはこの緊張感を持つことが大事だとずっと思っていました。そして地域連携コーディネーターに大切なことは「協調性」。一人でやることはほとんどないので、人と協力する力を忘れてはいけないと思っています。

「母校への恩返し」

長吉 真吾（香美市役所 街づくり支援員）

僕は山高の卒業生です。2年前、地域支援員として山田で働くことになって、地域の活性化に取り組み始めました。正木教頭先生が高校の時の先生だったこともあり、「何かしよう」と話しているうちに、このプログラムに誘われました。

僕は山田のまちの人たちをよく知っているの、先生に「あそこ言うちよってください」と依頼されたら、すぐいに行けます。今の仕事の延長線でこのプログラムにスムーズに協力できます。ここで顔見知りになった人たちにセミナーなどのイベントに声をかけやすくなるなど仕事につながっていくこともあります。楽しいし、僕にとっては自然な形で母校に恩返しができるのが嬉しい。

生徒からすると僕は「先輩」です。生徒の意見に賛同するのは6割、4割は批判、そんな感じでしょうか。

去年、メンターで入った時に比べると、今年の方がやりやすかった。今年の1年生は、CMづくりにしろ市長提言にしろ、アポ取りがずっとできます。チームの感じがいいので、進み具合もいいしアイデアにもそのよさが表れています。去年の1年生には少し苦労したけど、今年彼らが2年生になって少し変わったと思います。去年は思春期だったのか、今年は殻から出たなと感じます。

今年は吉田さんと2人で1年生を担当しましたが、吉田さんはパソコンが得意。僕は人に会うのが得意。僕の苦手な部分を吉田さんがサポートしてくれ役割分担がきっちりできて、すごく助かりました。

【2年生担当】

「目指したいと思う社会人たちと共に」

板原 慶典（高知工科大学4年）

メンターとして4か月関わった後、浅野さんに誘われて地域連携コーディネーターに。メンターは友達感覚でフレンドリーにやりましたが、コーディネーターは評価者として厳しくコメントすることも多く、近い距離間での関わりは難しいなと感じました。

僕はどちらかと言うと、まとめ役。混乱している状況では「今こんなことについて話しよるんやろ」みたいに話をまとめて、そこから投げる。メンターは同伴して後押しする役目でしたが、僕はちょこちょこ介入して、まとめて……のコーディネーターの方が向いている。

社会人コーディネーターは、僕より年上で、キャリアもあって、すごい方ばかり。先生方との話し合いでは、自分はどこまで発言していいのか、どこまで抑えるべきなのか、迷いました。でも抑えてたら何も始まらないと思って、溝渕さんにもガンガン食いついていきました。

この取り組みは数値でものがあがってくるというものではないので、手を抜こうと思えば抜けたのかもしれませんが。でも妥協したくありませんでした。止まっていたら使えない役で終わります。間違っているかもしれないけどできるだけ発言しよう、できるだけ成長しようと心掛けていました。責任感を持ってちゃんとやり抜くことが大事だと思います。

周りの社会人を見ると、すごい人がいっぱいいると気づきます。自分が今までやってきたことなんて、たいしたことない。そういう人たちに追いつこうと思ったら、自分をどんどん追い込まないとできません。社会人としてのゴールが身近にいるのがありがたいです。

「長期的な視点で生徒を見ていきたい」

溝渕 知秀（O'TREE カイロプラクティック）

僕はもともと教育に興味がありました。アメリカの大学で勉強しましたが、むこうは仕事をしていてこれを勉強したいと思った人が大学に行き直すという人が多い。僕は19歳でしたが、同級生が30代後半だったり。日本の大学は1度入るとなかなか専門が変えられないし、高校を卒業するまでにどこの分野に進むかを決めなくてはけません。進学したものの変更もできずドロップアウトする人もいました。

山田高校の総合的な学習の時間のことを知り、高校生が働いている人の仕事を見て、学んで、自分の将来のことを考えて……というのは、すごく意義のある授業だなと思いました。

生徒は僕のことを板原くんと同じ学生だと思っていたのでは……。仕事をしていますが、教師でもない。教えるという形よりは、「寄り添って」というスタンスでした。

2年生の県政課題の取り組みは、課題がいくつもあって、おとなでも難しい。どこまで関わるといいのか、どこまでガイドしていくのか、モチベーションを上げるのも大事。そういうところのバランスが難しかった。

僕が大事にしていたのは、短期的な結果ではなくて、長期的な視点で生徒のことを見るということ。将来的に「この授業を受けたおかげで進路が決まりました」「将来のことを少しでも考えました」と言う生徒がいたらいいと思っています。

地域連携コーディネーターの仕事は、勉強させてもらいながら手探り状態でやってきました。面白かったし、やりがいがあります。こういう高校が自分の地元であって、エネルギーある人が集まっているのはありがたいと思います。



竹内 寛敏（研修企画部長）

「肌で感じた生徒の成長」

地域の課題探究学習に取り組んだ山田高校生みんなは本当によく頑張りました。地域の現状・課題を知り、深め、解決策を考え、どんどん磨き上げをする。思うように進まず、行き詰る場面もありましたが、地域連携コーディネーター、大学生そして地域にヒントを求め、周りの協力を得ることで、ゴールにたどり着くことができました。

頑張った成果は提言時に各市長、知事からいただいたお褒めの言葉。この活動を通じて協働性、プレゼン力など生徒の成長を肌で感じる事ができました。

ある生徒が言いました。「地域のことで自分の知らないこと、発見がいくつもあった。将来は県外へ行こうと考えていたが、地元に残り、地域を盛り上げる役に立ちたい」。将来に対してしっかり考えを持ち始めていると感じた、うれしくなる瞬間でした。

この探究活動を、生徒、教員、そして地域の方々の満足度がさらに高くなるよう、全体で取り組んでいきたいと思えます。



助村 美保（1年学年主任）

「大人たちも勇気づけられた」

今年の1年生は、全体的な雰囲気として、「明るい・前向き・屈託がない」といった特性を、4月入学当初より感じていました。そのような特性を持つ集団として、いかに主体的に行動できるか、周囲の大人たちの支援によって、様々な仕掛けを作り上げていった1年でした。

「学び」の主役はもちろん生徒たちでしたが、それに関わった地域の方々はじめ、地域連携コーディネーター、大学生メンター、1年団の教員と管理職、多くの大人たちが本気になって考え、共感し、「新たな学びのスタイル」を創造しようと取り組んできたことが、成功への秘訣だったように思います。

多忙化が言われて久しい教育現場で、「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」は永遠のテーマですが、生徒たちの真摯な取り組み姿勢と、たとえ小さなゴールであっても周囲と協働しながら何かを達成したときの笑顔に、大人たちが勇気づけられたことも大きな成果でした。



島崎 恵理（2年学年主任）

「改良し継続していきたい」

まず初めに教員に課せられたのは、「手をはなし見守る」という意識改革でした。

学校から飛び出し地域の方々とかかわることで、自分の周りの小さな世界から、市町村、高知県へと生徒の意識が広がりました。自分たちのCMやアイデアが企業や地域に喜んでもらえたことは、地域の一員としての小さな自信につながりました。自主的にフィールドワークを行ったり、「なぜ？」という繰り返しに行き詰まってもくじけずチームで提言を作り上げていく過程、その提言を市町村や県で受け入れられる経験を通して、生徒たちは大きく成長していきました。

そんな生徒たちを「よってたかって」サポートしてくださった、地域企業や三市・県の方々、専門家、高知工科大学生、そして地域連携コーディネーターなど学校外の方々。本当にありがとうございました。このプログラムを、山田高校らしく少しずつ改良を重ね、大切に継続していきたいと思えます。

おわりに

山田高等学校長 濱田 久美子

3月15日、開花宣言。本県にいち早く春が訪れました。今年くらい春の訪れが待ち遠しかったことありませんでした。2月の厳しい冷え込みが桜を咲かせます。山田高校にも美しい花が咲き始めたようです。

「特色のないのが特色」。赴任当時、何度となく聞かされた本校への評価です。しかしながら、本校は地域性を発信することで地域の学校としてのあるべき姿を示し、特色ある学校に変わりつつあります。このたび依光運営委員長のお力添えで、その変化を報告書「よってたかって 生徒が育つ まちが育つ」としてここにまとめることができました。

本校は、平成28年度から「学校地域協働本部事業」に着手しました。校内に学校地域協働本部を設置し、運営委員会を開催、地域連携コーディネーターを配置しました。浅野さんを始めとする5人の地域連携コーディネーターとともに、総合的な学習の時間を活用した「課題探究学習プログラム」を「考えながら走りながら」開発し、実践してきました。コーディネーターがつなぎ役となって地域を巻き込み、生徒たちに「新たな学び」を提供してくれています。この学びは、地元香美市や香美市商工会、高知工科大学はもとより、香南市や南国市、知事を始めとする県の関係者、高知新聞社、電通の安田様、茨城県境町参与の塙様、いなかパイプの佐々倉様、マイクロソフト社の西脇様等々、数えきれないくらい多くの皆さまに参画いただくという他に類を見ない実践であり、産官学民挙げての極めてダイナミックなプログラムとなりました。今回、ご支援ご協力いただきました皆様に改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

生徒たちはミッションを通して、まちを知り、人を知り、地場産業を知り、地域の実態や課題について学びました。特に、地域の良さに気づかされ、心の内にある地域への思いを実感します。また、人との関わりの中で成長しているといった協働性の高まりを感じ、リーダーシップの在り方についても考えています。そして主体性。校内には「やりたい！やろう！やればできる！」といった雰囲気が醸成しつつあるように思います。これらは高校生の参画が地域を元気にするという実感と、自分たちの行動が地域を変えるとといった当事者意識を育みました。一方で、地域はそのような高校生の姿に勇気づけられ、未来に希望をもってくださったように思います。

まさにこの取り組みこそ、本校の目指す「地域の発展に思いを馳せ、地域創生に有為な人材を地域と一体となって輩出する学校」を実現させるとともに、「高知県に対する強い思いや誇りを持ち、課題解決のために果敢に挑戦しようとする生徒」を育てる教育活動であると言えます。

山田高校のチャレンジは始まったばかりですが、地域を巻き込んだ大きなうねりとなっています。これが本県全域に伝播し、この「新たな学び」が地方から日本を変える力になってくれるものと願いつつ、さらにプログラムを進化させていきたいと思っています。

編集後記

当初から目指していた「よってたかって」という言葉が、本当にびったりな取り組みになったなあと、今改めて感じます。多くの人を巻き込めば、それだけ大きな力になる。例えどこかで小さな火種が生まれたとしても、目指す姿を確認し合えば、どんな立場の人とも必ず協働ができる。それが、教育の凄さ、地域の凄さであると感じました。前しか見ずに走り続けた2年間。味わったたくさんの感動と関係者の皆様に心から感謝したいです。

(株式会社 StoryCrew 浅野聡子)

CM発表、市長提言、知事提言の場に立ち合っ、生徒たちの「ドキドキ」が手に取るように伝わってきました。高校生でこんな場に立てるなんて、とても素晴らしいことです。インタビューに応じてくれた生徒たちは、みな真っすぐで明るく前向き。教員をはじめ、地域連携コーディネーター、メンター、まちのおとなたち……高校生を育てようとしているみなさんの情熱に誘われ、わたしも何か……！の気持ちになりました。

(ひなた編集室 くにみつゆかり)

インタビュー・執筆／浅野 聡子・くにみつゆかり
アンケート設計・集計・分析／吉田 美遊・板原 慶典
デザイン／寺山 亜希

「よってたかって 生徒が育つ まちが育つ ～山田高校のチャレンジ～」 山田高校学校地域協働本部事業報告書

発行所：山田高校学校地域協働本部
〒782-0033
高知県香美市土佐山田町旭町3丁目1-3
高知県立山田高等学校
TEL：0887-52-3151

発行日：平成30年(2018)3月30日

編集：ひなた編集室
印刷：(株)南の風社

